

第9章

薬学部



1 新制大学薬学部に至るまでの歴史	708
2 創設期：1949～1955年	
(1) 金沢大学薬学部の発足	710
(2) 学部長選挙と抗生物質学講座の新設など	714
3 苦闘期：1956～1965年	
(1) 火災発生と5ヵ年計画による再建	715
(2) 豪雪下の学会	718
(3) 「薬友会」の改組	718
(4) 自治会雑誌『どくにんじん』の刊行	720
(5) 大学院修士課程の設置など	722
4 成長期：1966～1975年	
(1) 2学科制の発足	722
(2) 創立百周年記念式典	725
(3) 薬草園の問題	726
(4) 大学紛争及び学生との懇談会	727
5 雌伏期：1975～1985年	
(1) 第2世代の時代へ	728
(2) 1975年のカリキュラム改正	730
(3) 角間地区への総合移転	730

6 発展期：1985～1988年

- (1) 大学院博士課程の設置732
- (2) 3コース制カリキュラムの実施734
- (3) 日本薬学会第105年会の開催734
- (4) 入学試験制度の変遷など735

7 平成の時代：1989～1997年

- (1) 薬学部教育研究白書の刊行738
- (2) 教育改革740
- (3) 日本薬学会第116年会の開催744
- (4) その他745

8 将来展望

- (1) 薬学の理念746
- (2) 角間地区への移転747
- (3) 薬学における研究748
- (4) 大学院重点化構想749
- (5) 薬学部入学試験制度の改革749
- (6) 薬学部教育750
- (7) 薬学の社会への貢献750
- (8) 国際交流751
- (9) 薬学部の近未来像752

1 新制大学薬学部に至るまでの歴史

金沢大学薬学部は1867（慶応3）年7月に加賀藩14代藩主慶寧が福沢諭吉の『西洋事情』を読み、貧民病苦の救済が急務と考えて設けた卯辰山養生所（頭取：黒川良安）に製薬所と薬圃が附設された時を創立時点としている。製薬所は薬圃の植物よりシロップ、エキスやチンキ類を調製するとともに、舎密局などがあり、硫酸、塩酸、酢酸や火薬原料の雷汞^{ライコウ}などを製造した。化学知識のあった高峰元桂^{げんろく}（高峰讓吉の父）を舎密局総理として薬学関係の化学、植物学、薬剤学が講じられた。今日まで継続している薬系大学の中で最も古い歴史を持つ薬学校の誕生であった。

その後、加賀藩医学館製薬所（大手町：現石川県医師会館）医学館より独立した理化学校（兼六園・時雨亭跡）の加賀藩校の時代を持った後、1872（明治5）年、藩校廃止令により、一時私立の金沢病院薬局時代を経たが、1875年には県立となり、石川県立医学館製薬所と称した。翌年、診療（金沢病院）と教育（医学所）が分離されて医学所薬局学科として再発足したが、1879年に金沢医学校製薬学科と改称している。

1882年、政府は医薬系学校を甲、乙、2種に分け、甲種は育成を、乙種は速成を図るとした。医学校は設備及び教官陣などの所要の条件を満たして、1884年甲種に昇格した

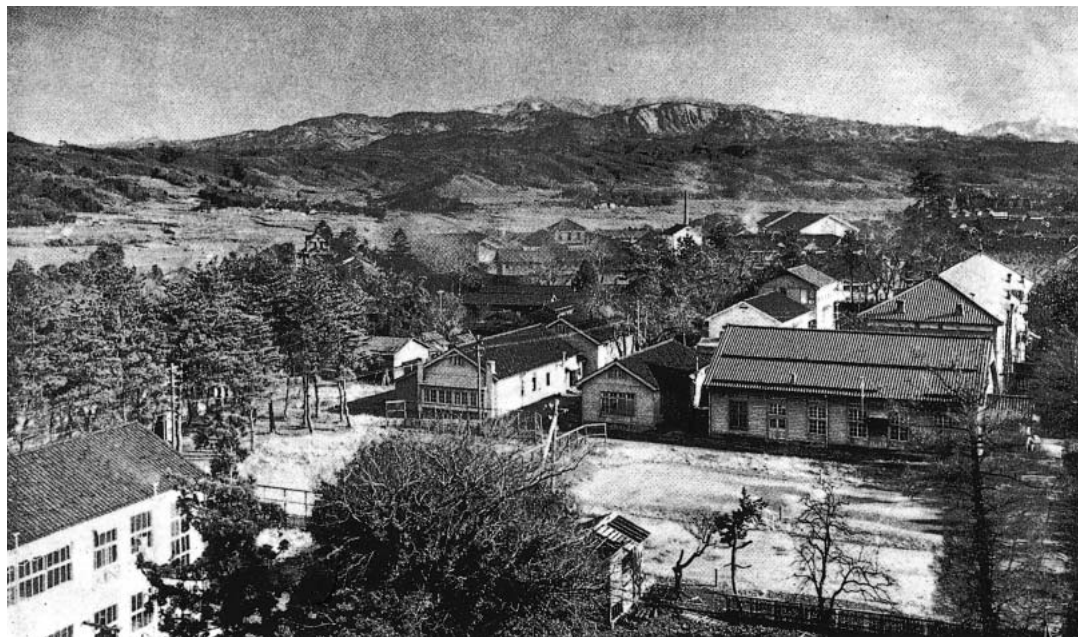


写真9 - 1 8講座が完成した1952（昭和27）年当時の小立野校舎遠景
（生薬学教室はまだ城内にあり、薬品製造学教室は旧雨天体操場を改造して使用していた）

が、薬系は東大卒教官2名以上が必要との昇格条件が満たせなかったので金沢甲種医学校附設の乙種薬学校にとどまった。1887年甲種医学校は第四高等中学校に医学部として編入されたが、附設の乙種薬学校は編入されず廃止に追い込まれた。やむなく金沢在住の薬舗主らの会（石川薬舗会：1890年に石川県薬剤師会に改組）は私立の北陸薬学講習所を石川薬館内（尾山町：現三共出張所）に開設して在校生の教育を続けた。一方、卒業生で医学部助教諭の堤是清は薬学校の廃止となるや大いに有志を説き、木村医学部長の意を受けて文部省に対し高等中学校に薬学科を開設することを再三要望した。その努力が実り1889年、全国に先駆けて官立・第四高等中学校医学部薬学科（広坂通り）の開設が許可され、薬学講習所の在校生は無試験で入学が許されたので講習所は発展的に廃止された。

次いで第四高等学校医学部薬学科時代を経た後、1901年、「専門学校令」により金沢医学専門学校薬学科に改称し、さらに1923（大正12）年、金沢医学専門学校の大学昇格に伴い、金沢医科大学附属薬学専門部として終戦を迎えた。その間、1929（昭和4）年に現在地の宝町キャンパスの一番奥に移転している。当時の建物は金沢医科大学の1教室に相当する、広さ430坪の2階建て本館（実習室4と図書室を含む）が主体で、これに増設された三つの講義室と雨天体操場があり、後者の北側は生徒が自由に閲覧できる教養的な本をそろえた棚の並んだ部屋に仕切られており、南側出入口付近には生徒のロッカーが並んでいた。中庭は実習用の薬草園になっており、ケシやカミツレなどが栽培されていたが、戦後食糧事情が厳しくなるに伴い政府の法令に従ってイモなどの代用食の栽培をしており、その後は小運動場になっていた。ほかに薬品倉庫や用務員室もあったが、全敷地の合計は2,300坪の小さな学園であった。

しかしながら内容的には充実しており、浅野三千三主事（1936年に学士院賞を受賞し、1938年に東大・薬教授に転任）を中心として開花した研究的な学風は後任の鵜飼貞二主事時代にも引き継がれていた上、1929年に生徒の有志が郷土出身の詩人、室生犀生の門をたいて得た学生歌「名無草」の歌詞に見られるように清新の気に満ちた学園であった。

名無草 作詞 室生犀星
作曲 弘田龍太郎

深雪（みゆき）のしたの 名無草（ななしぐさ）
けふは匂はむ はるは来（き）ぬ
鐵（くろがね）いろの とびらさえ
打ちくだかれむ 汝（なれ）が日に
汝（なれ）が日に
はるのとびらよ ひらかれむ

また講座数は6教室と少なかったが、掛見喜一郎（京大・薬へ転任）、塚本起夫（台北大へ）、浅野順太郎（金沢出身で東大では天然物化学の研究の天才と言われたが病弱のため終

第9章 薬学部

戦直後に逝去)、塚本長太郎(名市大・薬へ)、桜井欽夫(がん研究会へ)、吉岡一郎(阪大・薬へ)ら優秀な各教授が研究に意欲を燃やしていた。生徒数は1学年40名の小所帯なので、家庭的な雰囲気のもとに行き届いた教育が行われる一方、欠席届の提出はもちろん、教室内喫煙、外履のまま校舎内に入ることの禁止、和服外出時の袴着用などまで厳しく指導されており、進級試験では毎年1割ぐらいの生徒が留年の憂き目に会うほど厳格であった。

また多くの生徒は低学年から研究室に出入りしていて、東京・京都の2薬学系大学に劣らぬ研究レベルと学術的雰囲気は専門学校の中では突出していた学園であった。これは例えば薬専時代の卒業生1,112名(うち女子5名)中、博士号を持つ者が80名を超えており、大学教授が33名も育っていることを見ても推察できる。しかし大戦末期の生徒は勤労働員(日本冶金、武田、藤沢、日曹、富山化学、わかもと等)や疎開などで正常な授業が行われないままに終戦を迎えている。

そもそも北陸地区では早くから北陸帝国大学を設置したいとの要望があり、その運動は1911(明治44)年より始まり、1926年、1927年と続き、特に1929年には帝国議会衆議院で総合大学設置の決議案が可決されるまで進んでいた。1946年5月、再びその成立を意図して石川県議会全員協議会は文部・内務・大蔵の各大臣に意見書を提出するとともに、6月には北陸総合大学期成同盟会を設立した。別個に金沢医科大学附属薬学専門部でも大学昇格を目指して母学振興会を1944年に発足させていたが、戦後の学制大変革で一切がご破算になった。このため薬学部は博士課程の成立までに永い苦難の時代を経ることになる。

2 創設期：1949～1955年

(1) 金沢大学薬学部の発足

敗戦の傷跡なお痛々しい1946(昭和21)年の初頭、早くも金沢薬学の再建が始まり、金沢医科大学附属薬学専門部は石川県薬剤師会と合同で戦後初の薬学講習会を開いた。講習会の出席者は150名に達し盛会であったが、その際の集まりで戦後の薬学の諸問題がとり上げられ、その一つとして附属薬学専門部の大学昇格期成運動の布石として日本薬学会学術大会を誘致することを決めた。この決定に沿って学会中央の了承を得た上で準備が進められ、1947年5月15～16日、戦後はじめての日本薬学会学術大会が金沢で開催された。金沢は戦災に遭わなかった上、沢野前金沢市長、安藤県議会議長、石黒商工会議所会頭など薬学出身者に有力者が多く、食糧や輸送などで特別手配がされたことや、両日とも快晴に恵まれて鯛や鰯が豊漁であったことが宿舍の優遇親切とも相俟って、2,000名を超える

参加者に非常な満足感を与え、この学術大会は大成功を収めた。

1947年11月、進駐軍の指令による法律25号教育基本法、26号学校教育法（一県一大学制）の公布により、石川県に限定された範囲での北陸総合大学設立準備委員会が設置されたが、その最初の構想も医学部薬学科設置案であり、当初は薬学科が学部として組み換えられる客観的情勢は極めて乏しかった。鵜飼主事は学部として参加するため、金沢地区軍政部と接触して援助を求めるとともに、この間だけで十数回も上京して文部省などの説得に悪戦苦闘を重ねられた。時には三好竹勇代議士（1927年卒業生）の努力で竹田文部大臣と連絡がつき、文部省、大蔵省、東大・薬緒方教授、東京薬大村山校長らと会合を持ったが、話はまとまらないので会の途中で病中の浅野先生宅を訪ね、その出席を願ってようやく曙光を見いだしたとの記録も残されている。

1948年1月に北陸大学設立要項を文部省に提出した。3月末、幸いに学部独立の構想は了承され、薬学部を含めた医・工・理・法文・教育の6学部編成が指示されたので「北陸大学準備委員会」は「金沢大学実施準備委員会」と改称して、同年7月10日より新制学部創設の作業が始まった。

今となっては推察する以外に方法はないが、鵜飼主事は学問的雰囲気を高めて大学院博士課程の設置を早急に実現すること、及び多方面の社会的要請に対応するため医学部より独立した薬学部にすることを目指して、次のような点に力を注がれたように思われる。

1948年10月13日、第1回日本薬剤師協会北陸支部学術発表会があり、そのとき金沢大学薬学部創設記念会が浅野川沿いの尾山クラブで開催された。250名の同窓生の参集者を前にして鵜飼主事は「金沢大学薬学部の構想」と題する挨拶をしたが、その中で特に地方製薬事業の振興に力を注ぎ、優秀な人材を送り出して、将来県下至る所に製薬会社の高い煙突の立つことを期待するとの一大方針を明示した（この製薬産業興隆の意図は石川県民の気風に合わず成功しなかったが、転任した静岡は立地条件にも恵まれて現在、製薬産業の一大中心地となっている）。

もともと鵜飼主事は進歩的・革新的な意見の持ち主で、薬専時代既に講義に医学関連の解剖・細菌・薬理・医化学などの授業を加えていたが、さらに薬理学実習や商品経営学等を取り入れるため、修業年限の延長とともに薬学部の分離独立を考えていた。また医学部内にいることによる運営上の不自由、不満足と干渉から離脱したいとの意向も強く抱いていたことから、文部省の指示を喜んだが、一方、既に述べたように旧帝大系、特に東大では医薬はもっと緊密に連携すべきで医学部よりの分離・独立は学問研究上で時流に逆行しているとの意見があり、また各薬系学校は東大に追従する風潮もあったので事の解決は簡単ではなかった。鵜飼主事は東大と京大薬学科の薬学部独立を要望する一方、総合大学薬学部設置に関する意見書を関係方面に配布し東奔西走して説得に努めた結果、各薬系学校は新制大学に学部として参加することが決まったのである。旧帝大系の学部への移行は遅く、東大薬学部は1958（昭和33）年、京大薬学部は1960年である。

第9章 薬学部

また鵜飼主事は薬学部が学部として独立した以上、宝町キャンパスは他学部に比して敷地が狭くアンバランスであるとして城内への進出を考えた。一応教授会ではこの意向が多数を占めて学部の意見となったが、教授会内で医学との提携上の考慮から反対論もあった上、評議会では教育学部の反対を受けたため、規模は縮小されて、旅団司令部跡に事務室と生薬学教室を、旧馬場跡に薬草園を確保するにとどまった。その後、薬学は医学部に隣接して置くとの原則を文部省が決めたために、薬学部を城内に移転させる計画は立ち消えになってしまった。



写真9 - 2 城内 生薬学教室

また鵜飼主事は旧教育学系学校の余剰教官定数の学部への獲得に努力し、教授、助教授、助手、教務員各1名の講座編成を完成して研究体制の充実に力を入れた。これは他大学薬学部の教官陣に比してはるかに充実したものであった。

1949年5月31日、法律第150号国立学校設置法の公布により国立金沢大学が設置され、薬学部が誕生し、鵜飼主事が初代学部長に任命された。7月25日に第1回の入学式が挙行され学生40名が入学した。

1950年までに教授等の予定者を決定し、運営は旧制大学の講座制に準じて行うとして教授会を構成しているが、講座の増設もあり、新制発足時前後の教師陣は大幅に変動している（表9 - 1参照）。

専門課程では卒業要件として講義65単位、実習28単位（うち卒研5単位）の93単位の履修が求められており、8講座のため1講座当たりの担当単位数は現在よりかなり多い。

表9 - 1 金沢大学薬学部発足前後の教員一覧

発足前 6教室(1948年)

	教授	助教授	実験助手	
薬用植物学・生薬学	鶴羽松太郎		古源喜久治	永瀬 隆平
化学	森 元七		岡本 克昶	
衛生化学	平本 実		瀧 和子	安田 由郎
製薬化学	桜井 欽夫	田辺 良久	吉野 兄史	
薬化学	塚本長太郎	下谷 政雄	松山 正	
分析化学	鶴飼 貞二	荒田 義雄	長浦 菊夫	大橋 力
薬局長(兼任)	塚本長太郎			

発足後(1952年:8講座完成時)

	教授	助教授	講師	助手	教務職員
生薬学	黒野 吾市	木村 久吉		酒井 健	石田 知子
生化学	亀田 幸雄		豊浦 悦子	木村 行男	山添 寛
衛生化学	平本 実	福田 幸平	下谷 政雄		水上 勇三
薬化学	鶴飼 貞二	山本 譲	金原 三郎		金友 昭一
分析学	水野 義久	田辺 良久		小菅 卓夫	足立 龜久夫
薬物学	三浦 孝次		池田 政男	橋本 富次	五十嵐 良子
薬剤学	田辺 晋	金庭 延慶	大田 次作		磯野 照子
薬品製造学	荒田 義雄			大橋 力	板谷 芳京

また薬専時代に比べると薬物学及び生化学の新設で医系の科目は生理・解剖だけになっているが、実習も実施されていた(章末:附録9-1-1参照)。

さらに、研究的雰囲気を助長するために、1951年に『薬学部研究年報』が発刊され(1963年に修士課程実現で廃刊)学部内で行われた研究が多数掲載された。また後援会の組織を充実するために、1931年に発足させていた薬友会の規則を改正して新制大学の卒業生を含めて、一本化した薬学部同窓会を発足させることとし、2日にわたる熱心な討論の末、1953年1月17日に同窓会(会長:三浦孝次)の再発足を決定し、9月に同窓会報創刊号が発行された(「薬友会」の改組:3-(3)参照)。

1953年3月25日、理学部講堂で第一回卒業式が挙行され、37名の薬学士が生まれた。

1954年4月12日、鶴飼教授は初代学部長として学部の創設と発展に多くの功績を残して退官し、県立静岡薬大の学長として転出された。鶴飼教授の数々の業績の中でも特に母校の学部としての大学昇格は同教授の熱意によって実現したものと考えられるが、従来ともすれば薬学は医学の一分科と見なされがちであって、一人前に扱われなかったものである。近時における薬学の進歩は目覚ましく、学部への昇格が薬学の教育分野や研究領域の拡大にいかにも有効であったかを考える時、鶴飼教授の学部として独立すべきとした先見性と



写真9-3 鶴飼貞二教授
(初代学部長)

第9章 薬学部

行動力には敬服の念を禁じ得ない。また県立静岡薬大へ去られた後も金沢大学薬学部との縁は続き、関屋実、為政脩、山本丈夫、足立亀久夫、小菅卓夫、細井正春、山添寛、東野武郎、成田九州男、神谷弘子、橋本忠、全田浩などの旧教官や卒業生が県立静岡薬大の教員として集められた。

(2) 学部長選挙と抗生物質学講座の新設など

鶴飼学部長の退官に伴い、学部では学部長選挙規定を4月17日に急きょ制定し、1954(昭和29)年5月16日に選挙を実施して、三浦孝次教授を第2代薬学部長に選出した。

この年4月、薬学専攻科が設置され3名の入学者があった。

またこの年には、新制大学の中での優秀学部選ばれ、文部省より助成金500万円が交付されて(当時の講座費は8万円)各講座の設備充実に当てられた。

水野義久教授の北大・薬学部への転出

1955年6月、水野教授が新設の北大・薬学部へ転出した。前年「チアニン色素類の合成研究」で薬事日報学術賞(日本薬学会賞の前身)を受賞されたばかりであり、学生の信望も厚く学部の将来を担われる逸材であっただけに、この転出は学部にとって痛い配置換えであった。

抗生物質学講座の新設

戦後抗生物質の進歩に伴い、薬学の分野が微生物の代謝物質の研究に拡大されてきたので文部省に抗生物質講座の新設を申請していたところ、1956年6月に新設が認められ9講座となった。生化学講座担当の亀田教授が新設講座へ移行し、生化学講座は12月に山本助教授(薬化学)が昇任して補充された。

北陸薬学会の復活

終戦後、久しく休会中の北陸薬学会が日本薬剤師協会北陸支部の学術発表機関として復活し、1949年10月に発会式を兼ねて金沢大学薬学部で開催された(演題数35件)。その後しばらくは北陸3県の薬剤師協会の学術講演会として開催されていたが、1955年になって日本薬学会は各地に支部を設置することとなり、6月に九州支部、8月に東海支部及び四国支部が発足したのに続いて10月には北陸支部が創設されたこともあって、1960年からは日本薬剤師協会から独立して学会を持つことになった。現在は富山医薬大、金沢大、北陸大各薬学部の持ち回りの形で春秋2回の支部総会と支部例会を同時開催している(会員数:約800名)。

また1956年7月には学生自治会の機関誌として『どくにんじん』が発刊されている(自治会雑誌『どくにんじん』の刊行:3-(4)参照)、『どくにんじん』は28号(1981年)

まで続いているが、学生生活のにじみ出た充実した内容で学生の存在をアピールしている。この時期は国家試験の合格率もほぼ100%であり、学部創設期の多事多難な期間であったが、伝統的にも内容の評価でも旧帝大に次ぐ新制大学薬学系学部のトップとして輝かしい歩みを開始した時期であった。

3 苦闘期:1956～1965年

(1) 火災発生と5ヵ年計画による再建

新制大学薬学部として順風満帆の感のあった時代は長くは続かなかった。1957(昭和32)年5月5日に発生した薬学部の火災のため、この日は学部にとって忘れることができない日になった。未明の午前5時30分に発生した火は約3時間で木造本館の主要部を焼き尽くした。多量の溶媒が各研究室に置かれていたこともあって火の勢いは非常に強く、ナトリウムなどの水をかけると燃えだすものもあるとして消防士も消火に腰が入らず、集まってきた教職員や学生もただ茫然と見ているだけであった。出火原因は1階研究室の冷蔵庫への配線とされたため、管理不十分の理由で池田教授は減給10分の1、1ヵ月の処分を受けたが、この検証には今もって不明な点が残されている。

それより先、虫が知らせたと言うのであろうか、学部は新設の抗生物質学講座を本館棟



写真9-4 火災後の写真

第9章 薬学部

の内に置くことに決めたが、本館は狭小の上、図書室も収蔵図書の冊数が増し、床に過大な重量が加わって危険な状態になりつつあったので、同窓会の寄付で85周年記念図書館を別棟に建てることを1956（昭和31）年5月の総会で決議し、募金目標を130万円において活動を始めていた。そして同年11月5日には教育学部附属高等学校を解体した材料を再利用した図書室（66坪）及び事務室（50坪）の工事が完了したので、図書やバックナンバーは新しい図書館に、また事務室も城内より移し終えていた。貴重な図書類が助かったことや事務室が近くにある、その後の対策会議などの開催に支障の生じなかったのは不幸中の幸いであった。

原因の追及が終わった6月より校舎の再建運動が始まった。講義室、図書室、事務室、薬品製造学教室（旧雨天体操場）及び前年11月末に小立野キャンパスに移転していた生薬学教室（旧看護婦宿舎）などは難を免がれたので1日も休講せずに講義は行われたが、学生実習や研究活動は夏期休暇明けの9月まで停止せざるを得なかった。その間、文部省よりの応急復旧費200万円及び設備費400万円と大学本部留置の120万円を使って、実習室の整備や器具置き場、農夫小屋の研究室への改造などの応急処置がとられた。

一方、戸田学長は自ら文部省や薬業界を回って協力を依頼したが、学内でも7月に薬学部復興委員会が大学の各部局長により組織され、各学部の協力が約束された。三浦学部長・高畠事務長は文部省に陳謝に行った際に、罰として2カ年は建物は建てないと言われたが、教育・研究を放置することはできないので、苦肉の策として政治家に依頼することになった。三浦学部長は、まず実弟昇（1931年薬専卒）の養子先である富山県選出の松村謙三代議員（元文部大臣）に相談し、その後県会議員で母学振興会長の川崎昇太郎の仲介で、能登選出の益谷秀次衆議院議長の協力を得て、8月に校舎復興期成同盟会を発足させた（会長：益谷秀次、副会長：石川県知事、金沢市長、金薬同窓会長）。さらに10月には建築5カ年計画をつくり、第1期分として焼失した430坪分をコンクリート耐震耐火建築とすることに文部省の了承を得た。また県、市、同窓会三者の協力が求められたので同窓会は500万円の募金目標を設定して活動を開始した。

1958年4月、三浦学部長は任期満了となり、平本実教授が第3代薬学部長に併任されたが、平本新学部長の最大の仕事も火災後の復興であった。

第1期工事の起工式は1958年9月1日、益谷秀次会長、田谷石川県知事、土井金沢市長の臨席を得て焼け跡地のテントの中で行われた。

工事は急ピッチで進み、翌1959年5月27日に第1期工事（447坪）の竣工式が新築の4階実習室で挙行された。4階建てで、各階にはそれぞれ薬化学、分析学、抗生物質学、薬物学の4講座の研究室及び教官室が入り、学生実習室も各階に置かれた。建築の費用は3,647万円で、そのうち1,000万円は地元負担金の形で県500万円、市200万円、同窓会300万円の寄附金で支弁した。

引き続き平本学部長は第2期工事にかかることを決め、建築費用3,551万円のうちの新たな地元負担金1,000万円を県500万円、市300万円、大手製薬会社200万円の割合で



写真9 - 5 起工式

援助を願う計画を立て、戸田学長とともに協力依頼のお願いに回った。市長は快諾してくれたが、県からは建設予定のスポーツセンターの敷地として旧馬場跡の薬草園跡地を委譲するよう大学側をまとめてほしい、そしてこれが解決すれば補助金を出すという条件を示された。文部省や大蔵省の了解、及び大学と県の意見の食い違いなどでなかなか結論が得られなかったが、寄附金調達の見込みがついたので第2期工事は1959年8月に着工し、翌1960年3月に第2期工事（442坪）が完成した。しかし、県よりの補助金の交付が遅れたため、10月5日に木造の第2講義室で竣工式を行っている。この新築部分には薬品製造学、衛生化学、生化学（一部）、薬剤学（一部）及び生薬学の各講座が入居した。

更に1963年11月には第3期工事（164坪）が終了して薬剤学講座と中央精密機器室、図書室及び生薬標本室を整備することができ、竣工式を12月14日に挙行し、ここに復興5ヵ年計画は完了した。木造2階建て430坪の旧校舎が1,053坪の鉄筋4階建ての建物に生まれ変わったのであり、まさに焦土より不死鳥が飛び立った感じがする。この間、復興のために全力を挙げて対応された三浦・平本両学部長の労苦を忘れないようにしたいものである。

また、この火災で学部は県当局にも非常にお世話になったが、同時に木村久吉助教授が苦勞して立派に改修していた旧薬草園跡地の委譲を県より求められたとき、受け入れざるを得なかった原因になっていることも記しておきたい（薬草園の問題：4-(3)参照）。

この間に田辺晋教授（薬剤学）が1959年8月に内藤記念科学振興財団に転出のため退職している。先生は円満な性格の持ち主でいつもここにこと人に接しておられた。1974年に日本薬学会功勞賞を受賞している。

第9章 薬学部

1962年4月に平本学部長は任期満了となり、荒田義雄教授が第4代薬学部長に併任された。

(2) 豪雪下の学会

1963(昭和38)年は豪雪の年として今日でも有名である。前年末より全く降らなかった雪が成人式の1月15日より降り始め、毎日30cm以上積もる日が2週間以上も続いた。学部では木造校舎はもちろん、鉄筋コンクリート建ての新築棟でも危険となったため、学生を動員して雪下ろしがなされた。もちろん、一切の交通機関は途絶しているため、1階の庇くらいにまで積もった道を学生たちは歩いての登下校を余儀なくされた上、その道も立ち止まらなると交差できない状態であった。3月に入っても北陸本線は不通で、金沢地区は陸の孤島ようになり、生活必需品さえ不足する有様であった。

このような悪い環境条件なのに、不運にも学部では4月7～9日に第17回薬学大会の開催を引き受けることが以前から決まっていた。当時は薬学会と薬剤師会が合同で学術大会を開いていた時代で、衛生部会と薬剤部会及び開局・学校・保健所の各薬剤師部会と女子薬剤師部会を「一部」として春に開催し、その他の部会は「二部」にまとめられて秋に開催されていたのである。雪のため荒田義雄大会委員長以下の労苦は倍増した。例えば、設営でも主会場の観光会館などのある本多町まで資材を運ぶことはもちろん、調査に行くことさえままならない状態なので、一切の準備は学部内の机上作戦でやらざるを得なかった。そこで4カ所の各会場ごとにそれぞれ設営責任者(越村三郎、板東芳雄、山本譲、大橋力)を任命して仕事を分担することにし、各責任者は担当会場の正確な図面を用意してプランを練った。また使用する物品はプロジェクター、スクリーンはもちろん、鉛筆一本に至るまで正確に把握して借用あるいは購入し、各物品は各会場ごとに異った色のテープを貼って分別した上で保管して輸送や設営時間の短縮に努めた。幸い前日になって観光会館付近の雪の量が減り、トラックが直接会場に横付けできる状態になり設営にかかったが、各会場とも準備が完璧にできていたので、ほとんど予定時間内に設営は完了して支障なく学会を開催することができた。約4,000名の会員の参加をみて、盛大であり、行き届いた学会であったと好評を得た。

(3) 「薬友会」の改組

まず「薬友会」の歴史について簡単に述べてみたい。

金沢大学薬学部の同窓会組織は最初、医学部十全会の中に包括されていたが、1912(大正元)年に当時の生徒たちが大変な努力を払って十全会より独立して「金沢薬学会」と名乗り、教職員、卒業生及び在校生を会員として自分たち独自の『金沢薬学会誌』を発行した。当初は学術記事と会員の消息程度の内容で年間2回程度発行していたが、1931年

に浅野三千三教授の主事就任とともに新しく会則を設けて再発足した。

しかし戦局の悪化に伴い医科大学附属の金沢・千葉・長崎の各薬専が戦時下の学校整備の対象として取り上げられているとのうわさが飛んだこともあって、1944年に名称を「振興会」と改称して旧制大学への昇格を主目的とした同窓会組織に改組しているが、会誌も1945年9月の第80号を最後にパンフレット程度の形でやっと維持されていた状態で、活動範囲は在校生中心にとどまり、同窓会の活動は事実上中断した形になっていた。

新制大学発足後の1950年秋、大学昇格祝賀記念同窓大会の席上、鶴飼学部長の要請で同窓会の再建が決議され、薬学部同窓会結成準備委員会を設けて作業が進められた。しかし在校生中心の「振興会」一本でいく案や、昔の「金沢薬学会」に戻して母校と同窓生をつなぐ機関にする案のほかに、新制大学の薬学部は新しい脱皮した組織を持つべきだとして旧薬専時代との一本化に反対する意見も強くあって、鶴飼学部長はこの問題を当分の間、見送りとしていた。

しかし新制度第一回生の卒業時期も迫ってきて、いつまでも放置できない状況になってきたので、1952年の暮れに2日間にわたり討論会を持ったが、依然として学生側に参加に反対する意見が強くあって了承が得られなかった。やむなく新旧卒業生だけを会員として再発足することにして、1953年1月17日に薬学部講義室で創立総会を持ち、名称を「金薬同窓会」と改め、9月には金薬同窓会誌の第1号を発行している（第9号まで続く）。この時の会費は3,000円であったが、従来の在学中に集めた終身会費を基金として会を運営する方法は戦後のインフレのため行き詰まっていたので、この年新たに旧薬専卒業生より会費3,000円を再徴収して基金を補強し急場をしのいだ。しかし財政的にはまだまだ不



写真9 - 6 『金薬同窓会誌』と『薬友会誌』

第9章 薬学部

安定であり、図書室の移転や火災の復旧などでは、その都度卒業生に寄附をお願いせざるを得なかった。

新発足の「金薬同窓会」は、卒業生だけの会員組織であったので、会長も卒業生の中より選ばれているなど、会の運営上で幾つかの欠点があることが早くから言われていた。特に終身会費を卒業時に収めるため会費の徴収率が低いことは、事業をする上で致命的欠陥であった。

火災の復旧に見通しの立ち始めた1962（昭和37）年6月に、教授会の席で同窓会の再改組が有志の教授より発議されたので、9月には「金薬同窓会」の理事会を開いて改組の同意を頂き、10月より荒田学部長を長とした7名の委員で規約作成委員会を結成して作業を始めた。予想以上に時間がかかり、来春の薬学大会の準備をする必要から作業を一時中断して、翌1963年7月より再開したが、教授会での修正もあり、原案のできた時は11月になっていた。学生には不利な点もあることから、11月半ばより学生の理解を得るために懇談会や討論会を全体あるいは各クラス別に持ち、最後は90%以上の賛成を投票で確認した後、平本教授を長とした設立準備委員会を発足させて名称や理事、監事の人事などの原案を作った。委員として熱心に参加・討論された、故田中嘉太郎、湯浅豊之助両氏には敬服させられるものがあった。年を越して翌1964年4月になり、新入生や今まで関心の少なかった新2年生から十分討議されていないと言い出されて三浦会長に心配をかける一幕もあったが、同年4月25日、医学部十全講堂での設立総会で準備委員会の原案が承認された。名称を「金沢大学薬友会」と再び改称し、会長には4月に新任されたばかりの第5代薬学部長の黒野教授が就任した（副会長：亀田幸雄、安藤治夫、理事長：田中嘉太郎）。学校側と更に密接な関係を築くために学部長を会長にすることや、新たに学生並びに教職員を会員に加えて、卒業生と三位一体の親睦を保つという戦前の同窓会組織に戻す大幅な規約の改正をしたわけであるが、これにより学生の自治活動を更に援助することができるようになり、学生が入学時に会費を納入するように改めることによって財政的にも安定させることができた。12月に『薬友会誌』の創刊号を発行し、現在34号を数える（1997年現在）が、毎年発行の会誌では学部内の事情説明のほか、卒業会員の消息を掲載し、さらに5年ごとに会員名簿を更新して卒業生会員と学部との密接なつながりを維持する役割を果たしている。会費は物価の上昇に伴い1969年より5千円、1975年より1万円、1977年より2万円、1996（平成8）年より3万円となっている。

（4）自治会雑誌『どくにんじん』の刊行

新制大学発足後の自治会では、学部学生相互の親密を増し理解を深めて、家庭的な薬学部を作る一助になればとして、ガリ版の新聞『やくがく』を、次いで1954年からは『金沢大学薬学生新聞』を年に数回出していた。しかし新聞は活版印刷で発行経費も高く、ガリ版にすれば雑誌形式にしても経費が安くなり、内容も豊富にできると考えて、名称を公

募して『どくにんじん』と改称し、内容も硬かった新聞から文芸中心のいわゆる軟弱ものに変えて、1956年7月に『金沢大学薬学生新聞』の別刷り特集号というぐらゐの軽い気持ちで雑誌形式の第1号を発刊した。当初はいつ廃刊になるかを心配しながら年に2回出していたが、定着して第8号より年1回発刊に変えられた。「当学部学生気質」(5号)、「薬学部の姿とその問題点」(9号)、「薬学部学生の生活」(12号)、「薬学の現状と将来」(13号)、「大学問題」(16号)、「薬学と薬学教育」(20号)、「医薬分業」(21号)、「薬学における女子学生」(22号)、「国家試験」(26・28号)などの特集を毎号のように記載しているほか、各教室紹介、教官と学生の対談、学生懇談会、クラス討論会、学部の自治会活動状況やアンケートの結果などを記載しており、学生だけでなく教官も投稿してお互いに考えていることを述べあって学部内の風通しを良くする役割も果たしていた。今、振り返り眺めると学生の生活がにじみ出ているとともに、カリキュラムの過密、試験制度、教育方針(2学科制の意味のあいまいさや臨床薬学の軽視)等々で学生の意向が教育方針に十分に反映されなかった結果、学生が薬学部の現状に悲観して学習の意欲を失っていった姿もうかがえて反省させられる。

編集の内容も長い間に徐々に変わっているが、最終号でも随筆、小説、詩や旅行記などの文芸スペースは十分取られており、毎号、150ページ余りにも及ぶ記事の編集やその費用を集めるための広告依頼は、各クラスから参加した学生委員によって行われていたことには敬意を表したい。学生の気風が変わったためか、1981年に卒業アルバムの発行に切り替わり、28号(1982年3月)で廃止されたのは残念である。なお1955年卒業生の手持っていたクラス誌『みちくさ』が『どくにんじん』の発刊に刺激を与えたと思われるが正確



写真9-7 『やくがく』、『金沢大学薬学生新聞』、『どくにんじん』、『山毛櫛』

第9章 薬学部

には分からない。

このほか、学生発行のクラブ雑誌として、山岳部より1960年初版の『山毛櫨(ぶな)』(1993年に12号で中断)と1980年から続く軟式庭球部の文集がある。

(5) 大学院修士課程の設置など

この時期に学部内で起こった事項について記す。

大学院修士課程の認可

1964年、長年にわたり申請していた大学院の修士課程が前年の理学部に次いで認可された。正式決定が3月末になったこともあって、5月1日に入学式が挙行され、3名が入学した。

同年9月には日本生薬学会の金沢大会が十全講堂及び薬学部の第一講義室を会場として開催された。発表演題数は41、参加者は200余名で、翌日は医王山で植物採集を行った。

池田鉄太郎教授の転出

1962年、武庫川女子大学に薬学部設立が認められ、初代学部長として池田教授(薬化学)が候補者に挙げられた。先生は金沢の風土や研究環境が性格に合っているとして神戸出身にもかかわらず固辞されていたが、兄事する京大・薬の富田・上尾両教授から何回もの説得を受けて断り切れなくなり、1月末に金沢大学薬学部を辞任した。学部の関係者としては坂東芳雄(1941年卒)が薬理学担当、木村行男(1950年卒)が生化学担当の各教授としてともに赴任した。

池田教授の後任には新進気鋭の友枝宗光教授(九大・薬)が迎えられ、5月に着任した。

4 成長期:1966～1975年

(1) 2学科制の発足

1965年ころより我が国は戦後のベビーブームによる大学進学希望者の急増が予想される一方、産業界からは高度の技術を有する人材を求める要望が強くなっていた。これに対応して1961年7月より日本薬学会は検討を開始し、その一部は翌1962年に薬学白書として公表された。また1965年3月に大学基準等研究協議会は大学における薬学教育には単一学科は認めず、3学科を基本とするも例外として2学科で編成してもよいとの結論を出していた。この線に沿って各大学の薬学部も複数学科制を取り入れる態勢を整えつつあ

たが、本学部でも薬学科一本の教育方式では学生が将来の進路と関係なく多岐にわたる講義を履修しなければならないこと、及び定員が少ないことなどに基づく社会的寄与の低さを解消する好機としてとらえ、1964年2月より2学科制対策委員会を設けて検討を行っていた。基本的には物理化学、有機化学、生物化学の三本の柱の上に応用科目を積み重ねることに決め、特色（重点）を医薬品の創製及び生産のための研究者・技術者の養成に置くことにして製薬化学科を選び、医療・衛生薬学の部門はあきらめて当面2学科制を採用することに決めた。さらに、当時は化学偏重の色彩が強かったので、この機会に学部には足りなかった生物系講座の補強も考え、合成化学、物理化学、生物薬品化学、放射薬品化学の4講座を新設することにして1965年度より開設を文部省に申請していた。その年は全薬系大学とも見送られたが、1966年1月には内示があったので、本学では新設の4講座に既存の製剤学講座（薬剤学を改称）と薬品製造化学講座（薬品製造学を改称）を加えた6講座で製薬化学科を編成して2学科制へ移行し、定員も80名に増員された。また学部内では受験者数の増加に対応できないとの予想から、急遽、県立金沢泉丘高等学校を借りて入学試験を行い4月入学に間に合わせたが、ほかの高等学校から不公平であるとの不平が表明されたため、金沢泉丘高等学校の使用は1969年で取りやめた。その後入学試験は、金沢大学教育学部附属高等学校、次いで1981年からは薬学部で実施されたが、1987年に至って再び受験者数の増加が懸念されたことから金沢大学医療技術短期大学部に試験場を移し、分離分割方式の定着を見極めた上で1992（平成4）年からは薬学部に戻して入学試験が実施されるようになった。

1967（昭和42）年秋、新制度の学生が専門課程に進学して、新カリキュラムに基づく授業が始められたが、この時はじめて選択制が取り入れられた。薬学科、製薬化学科それぞれの特色を出すために苦心の跡が見られるが、薬剤師国家試験の受験科目の履修を両学科の学生に等しく求めた上、両学科の実習を共通に行ったこともあって、製薬化学科の特色がすっきりと出ていない。2年の前期に講義5単位（薬用植物学、薬品物理化学、植物分類学、薬学史）と薬用植物学実習1単位を教養部の時代に出して、学生の負担を軽減する努力もなされているが、科目数の増加のため前・後期とも8限の時間割となり、遅い終業となるなど、かなり無理をしたカリキュラムであることは否めなかった（章末：附録9-1-2参照）。

2学科制完成時（1969年6月）における各学科の教官陣容は表9-2のとおりである。新設の各講座で教官4名の線を維持するため荒田学部長や滝本事務長が多大の努力を払われたことを付記しておきたい。

また本学では1968年秋に専門課程の2年生が進学してくるため、文部省の了解を得て1967年3月から6階建ての製薬化学科棟建築に着工したが、増設講座の教官がまだ赴任していなかったので、各講座より一名ずつ選ばれた建築委員会（委員長：山本讓教授）を設けて教授会の了承をとりながら作業が進められた。敷地が狭いので6階建てとし、旧館との往来の便を考えてL字形に置き、各階はそれぞれ廊下で結ぶ形にすることにした。ま

表9 - 2 2学科制完成時の教員組織

(薬学科)

	教授	助教授	講師	助手	教務職員
薬化学	友枝 宗光	古賀 俊隆		犬塚 学	中村 幸子
薬品分析学	高橋幸太郎	田辺 良久		宮下 修一	高荷 昌子
衛生化学	平本 実	岡田 幸蔵	下谷 政雄	永井 外夫	
薬物学	五味 保男	池田 政男	大橋 冨次		五十嵐良子
生化学	山本 譲	佐竹 正年		新田 啓一	桐山 典城
生薬学	黒野 吾市	木村 久吉		磯野 博	油野 截子
抗生物質学	亀田 幸雄	金友 昭一		松井 勝彦	山田 知子

(製薬化学科)

	教授	助教授	講師	助手	教務員
薬品製造化学 (振替)	荒田 義雄	大橋 力		安田 信吾	塩田登美子
製剤学 (振替)	山名 月中		水上 勇三	辻 彰	村井 清子
薬品合成化学 (1967年度)	藤井 澄三		板谷 泰助	吉藤 茂行	田中孚美子
薬品物理化学 (1967年度)	細谷東一郎	長井 幸史	板垣 英治	水上さよ子	
生物薬品化学 (1968年度)	大場 義樹			林 健志 夏野 徹也	玉川 雅子
放射薬品化学 (1969年度)	堀川 正克	二階堂 修	鈴木 文男	三輪真知子	
中央分析室			板谷 芳京		北川志津子

た講義室や事務室など学生の利用度の高いものほど下の階に置くことにしたので、必然的に講座の研究室は4階以上となった。研究室をより有効に利用するため廊下を挟んだ研究室の広さを変えると、エレベーターの設置、スチーム暖房の採用、直射日光を避けるための避難用を兼ねた庇を作るなどの配慮がされた。またセミナー室や元素分析室をはじめとする各種測定機器室や製氷機室などは各階の中央部に集めて使用の便が計られる一方、たまたま旧館の暖房の取り付けと時期が重なったので、取り外したサイドテーブルを新館で再利用するなどに努めるとともに、手直しの費用を削るため、業者(浅沼組)とは建築中にも綿密に打ち合わせをして経費の削減に努めた。この時の建築委員会の仕事は本部の施設部でも評価されていたとみえて、当時の本部施設部長が10年後の文部省施設課長時代に薬学部の申請した鉄サッシ(窓枠)更新の要求が他学部比べて非常に早い時期に認められたことに連なっていると思われる。

1968年1月25日に竣工式を挙行しているが、製薬化学科棟(1,100坪)の完成により薬学部の総建物面積は2,153坪となり、これに講堂(平屋60坪)が附置されており面目は一新された。講堂には黒野学部長の「百周年を記念して薬友会員が相はかり、広く有志の

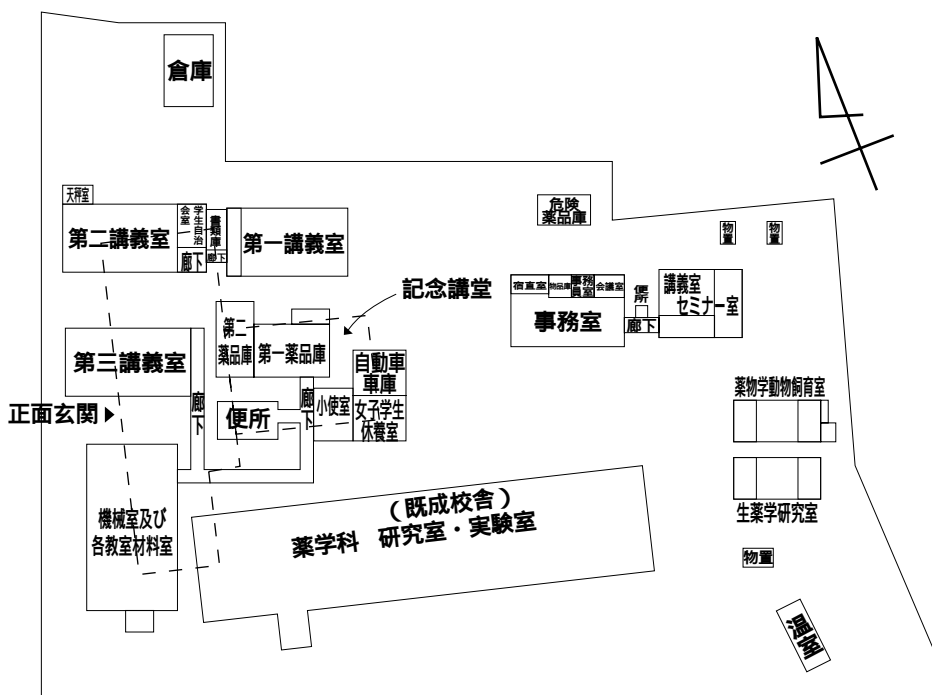


図9 - 1 旧校舎と製薬化学科棟（6階建て）の配置図

後援を得て建設した」との由来と「母校の前途益々の隆昌を祈念する」と書かれた額が掲げられている。講義はもちろん、各種の行事や式典、特別講演などの色々な形で使用されており、学部として不可欠な施設となっている。

この時の募金総額は県・市や業界の支援もあって目標の1,200万円を超え、机、椅子、教卓、カーテンなどの内部設備のほか、金沢大学薬学部百年史刊行費や記念式典費もこれより支弁することができた。

（2）創立百周年記念式典

1967（昭和42）年10月28日、かねてから百周年記念会（総務委員長：川崎昇太郎、副委員長：平本実）を発足させて準備を重ねてきた百周年記念式典が、医学部十全講堂で参加者500名を集め盛大に挙行された。文部大臣（代理）、県知事、市長、川崎近太郎薬科大学代表の祝辞の後、沖勤六卒業生代表及び学生代表の挨拶があり、記念講堂の贈呈を中川善之助学長に対し行った後、女子学生による学生歌「名無草」の斉唱で式を閉じた。式後、北鉄バスで尾山町の中小企業会館に移動して祝賀会を開き、開学百周年を祝い合った。記念品として三浦教授を編集委員長として編纂された『金沢大学薬学部百年史』と桐製の火鉢型タバコ盆が配られた。

また三浦孝次著の『加賀藩の秘薬』（石川県薬剤師協会：1967）もこの年、石川県薬剤師会

第9章 薬学部

より非売品として発刊され、薬剤師会会員に配布された。その第2部の「秘薬の解明」の部に薬学部百年の歩みが記述されている。この本の刊行は1957(昭和32)年の火災で原稿及び資料が焼失したために中断していたものであるが、開学百周年記念行事を機に完成された。

1968年3月に黒野学部長は任期満了となり、4月より荒田教授が第6代学部長に再選された。

同年10月、金沢観光会館で第1回の寮・校歌祭石川大会があり、4,000余名の観客の前で卒業生53人により「名無草」などが斉唱された。

(3) 薬草園の問題

薬草園は講義用の標本や実習用教材を供給する薬学部では必須の施設であるが、ある面で本学部での薬草園の歴史は木村久吉助教授の苦闘の記録であるとも言える。

既に述べたように、学部の城内進出の一環として、1950年春に薬草園が城内の旧馬場跡に開設されたが、そこは深さ2尺の砂地で、旧四高のプールの水を桶で運ぶなど木村助教授の苦労が実って、1952年夏には約350種の標本植物が植えられていた。

ところが1956年に学部は城内から撤収することになり、生薬学講座も移転することになったため、1957年春に薬草園も宝町キャンパスの一隅(3,170m²)に移った。しかし、そこは昔、軍事教練に使っていた松林の小山でゴミ捨て場でもあったので、木村助教授は再び開墾から始めて、ガラス、煉瓦、鉄くずや大小の石塊を除いて代わりに川砂を混ぜたり、兎の死骸や馬糞を入れて地味を肥やすなど、自ら汗を流して働いた。

たまたま火災が発生して旧校舎本館が全焼したために、新校舎再建の工事用車輛の出入口を薬草園の北端を削る形で作る必要が生じたので、木村助教授の了解を得て、1958年秋に現在の金沢美術工芸大学前へ通じる通路が開けられた(この道路は1960年5月に正式な通用門の形にして、工事を請け負っていた浅沼組から寄贈された)。

1969年には文部省より薬草園の附設が制度的に認められ、木村助教授が生薬学講座から、約1,000種の各種草木を植栽し維持する薬草園施設の専任となったが(園長は生薬学講座教授)、同時に認められた助手定員はほかの不完全講座に流用された。

1970~1971年にかけて小立野にあった刑務所が田上に移転した。その跡地は金沢美術工芸大学がまず使うことに決まっていたが、まだ半分ばかり空いていた。荒田学部長は当時の徳田金沢市長と家も近く、古くからじっ懇の仲であったので、この土地の入手を依頼され、話はかなり進んでいた。このことは荒田学部長の同窓会総会での発言や、1972年2月に教授会で刑務所跡への学部全面移転を決めていることなどより推定できる。

一方、1972年開設予定の金沢大学医療技術短期大学部もこの土地に目をつけて市議会などに熱心に働きかけていたようで、結局この土地は医療技術短期大学部が使用することになり、大学本部の折衷案をのんで薬学部はそのうちの2,600坪を薬用植物試験圃場の名義で確保する約束ができていた。しかし、医療技術短期大学部の規模がその後大きくなっ

たことや、薬学部の現校舎の建築後の経過年数の不足も理由になって、いつしかこの約束も消えた形になっていった。さらに1975年ころ、市道を拡張するために薬草園側を約6m後退させる案が市議会を通過したので、9月の教授会ではこの削減をやむなく了承したが、薬草園に植えられている植物を早急にどこかへ移植させる必要が生じていた。折あしくこの時期に高橋学部長が腰痛を理由に退任されたので、この移植地探しが11月に就任した山本学部長の最初の仕事となった。就任祝いに来た旧知の医療技術短期大学部事務長から、医療技術短期大学のこの土地への移転はすでに確定していることを聞き、何とかその一隅に薬草園の植物を移せないかとの相談を、当時医療技術短期大学の主事を兼任していた高瀬医学部長にもちかけた。高瀬教授はこれに好意的に対処し、図面の上で何回も移植候補地を話し合ったが、結局食堂や体育館の配置上より薬草園敷地を旧刑務所跡地の中に用意することはできなかった。

この問題は当時の豊田学長への相談にまで至り、岡市長（当時）の私有地であったキゴ山の放牧場などを見に行ったこともあったが、最終案として名鉄グループより金沢大学に寄贈されていた辰口の丘陵地内13,000坪を利用する案が浮上し、学長の強い支持を得て評議会も通過し薬学部の所有となり、緊急の移植場所を用意することができた。

その間に木村助教授は田上のゴミ埋め立て地の利用を市に打診して許可されたので、1976年3月にヒガンバナなど15種を移植している。

その後、幸か不幸か道路拡張計画が住民の立ち退き問題で大幅に遅れ、現在では角間の移転地に直接移植ができる状況にあるが、移植場所はまだ確定していない。

1977年、薬草園は薬用植物園に名称を変えたが、同年薬草園の一隅に放射性同位元素研究棟を建築する計画が生じ、医学部と木村助教授の間でトラブルがあったが、一部を削って建てることで決着した。医学部には薬草園は薬学に貸しているとの考えがある一方、木村助教授には当然のことながら自分が育てて立派な薬草園にしたとの自負心と植物への愛着心があって、両者の落差が大きかったためであるが、これらを含め最大の原因は薬学部の敷地が狭すぎるためであり、薬草園は歴代薬学部長の頭を悩ませる問題であった。

1988年3月、木村助教授は停年で退官し、後任に御影雅幸助教授が富山医薬大・和漢薬研究所より7月に赴任した。

1997（平成9）年春より市の道路拡張工事が始まり、現在、薬用植物園の残存部への移植作業が行われている。

（4）大学紛争及び学生との懇談会

岸内閣の戦前回帰路線とアメリカよりの強制による軍備の増強に対する国民の反発、及び社会機構の巨大な高度成長に伴う大学組織や教育方法の古さへの不満が高まり、樺美智子の国会構内死亡もあって燃え上がった第1次大学紛争（60年安保）であったが、薬学部の学生は比較的冷静で自治会の学部ストを打とうとした試みも中止された。

第9章 薬学部

その後10年を経て第2次大学紛争（70年安保）を迎え、大学は学問研究の場より国民の高等教育と人間形成の場へと変化していたとはいえ、運営は旧態のままの教授会自治であり、学生の意見を十分にくみ上げてはいなかったと言える。

本学でも1965（昭和40）年に教養部が、1966年には竣工なったばかりの学生会館が革マル派学生に占拠された。その後紛争は更に拡大し、1969年には中核派及び革マル派学生による本部や教養部の封鎖のほか、各派間の内ゲバやベトナム反戦、安保破棄や大学紛争収拾法案反対のストライキなどが多発して、大学の管理能力が問われる状態が続き学園は荒れていた。

これに対し薬学部では、荒田学部長の英断で1969年6月から作り始めた素案をもとにして、学生（クラス、自治会、院生会の代表各2名）との懇談会を1970年1月より定期的で開催し、学部長以下議題担当の教官が出席して学生との意思の疎通を図ることに努めた。新カリキュラムや医療技術短期大学部敷地への移転の説明のほか、学生掲示板、自転車置場の設置、講義室のスピーカーの整備や実習器具の破損費弁償の不平にこたえて、器具を全面的に校費負担とする中央管理システムを新設するなど数々の要望に誠実にこたえていたためか、学部自治会が授業料値上げ反対やその不納決議をするなどの動きはあったが、他の学部に比べてはるかに平穏に推移することができた。この学生との懇談会の制度は現在も続いている。

荒田学部長の任期満了に伴い、1972年4月、高橋幸太郎教授が第7代学部長に就任した。

5 雌伏期：1975～1985年

（1）第2世代の時代へ

1975年からの数年間は、金沢大学の将来計画達成のための法文学部の文・法・経3学部への分離が最優先順位となったために、薬学部の最大の目標である大学院博士課程創設の問題が全く進行せず（3-（5）参照）、他の大学に追い越されていく状態を横目に見ながら過ごすことを余儀なくされた。刑務所跡地の取得や薬草園の種々の問題（前述）も未解決のままに残っており、また薬学教育の再検討も必要とされている状態に置かれていて、学部としては火災発生以来の最も苦難で忍耐を強いられた時期であった。

さらに1975年には黒野教授の停年退官、1976年には友枝（エーザイへ）、細谷（千葉大・薬へ）両教授の転出や亀田教授の停年退官による教授選考人事が急がれていたのに加えて、同年北陸大学薬学部の創立に伴う教官の大幅な退職異動があった。さらに1977年春には荒田教授（停年退官）をはじめとする北陸大・薬への更なる教官の供給や、教授新

任によるメンバーの更新などが続いたので、学部教官の交替はこの2年の期間だけで6割以上に達した。新制大学発足時の教授は全員いなくなって、教官陣容は第2世代に入ったといえる。まさに学部創立以来の激動の時期であった(表9-3参照)。

参考までに、この時期北陸大・薬へ移った母校の関係者は、鶴飼貞二名誉教授の名誉学長、三浦孝次名誉教授の初代学長をはじめとして、亀田幸雄、荒田義雄各名誉教授、田辺良久、金友昭一、松井勝彦、永井外夫、桐山典城、吉藤茂行、宮本悦子の各教官、及び卒業生では山田澄(神戸薬大)、金原三郎(石川工専)、越浦良三(がん研)、塚田司郎(広島大・医)、久野栄進(金沢大・理)、酒井健(大正製薬)、橋本忠(静岡薬大)、坂元倫子(医療短大)、亀田幸彦(武田薬工)、河嶋進(がん研附属病院)、紺谷仁(名市大・薬)、宮本謙一(北里大・薬)や大木、田中、長谷、宮本、宮野などを含め総数約30名であった。

このような困難な情勢下であったが、第2世代の教官陣は総合移転問題に足並をそろえて対応したほか、薬草園の敷地問題では辰口に13,000坪を入手した。また、さびてガラス窓が危険になっていたので着手したアルミサッシへの改修が、結局は外壁の全面改装に拡大して薬学部の校舎が見違えるほど美しく生まれ変わった。同時に、ドラフトの大補修工事も行われた。また薬系出身者で附属病院の薬剤部長職を確保するため、やむなく山名月中教授を病院薬剤部へ割愛した問題や、400MHz核磁気共鳴装置の導入なども難しい問題であったが、全員の協力の下に乗り切ることができた。1979年10月、山本学部長は任期満了となり藤井澄三教授が第9代薬学部長に就任した。その後、山本教授は金子学長に懇望されて、1980年4月より2期4年間、学生部長を兼任した。

表9-3 1977(昭和52)年春の教官構成

	教 授	助教授・講師	助 手	教務職員
薬化学	金子 主税	染井 正徳	伊達 孝保 北村 令子	
薬品分析学	高橋幸太郎	高荷 昌子	松沢せつ子	浜下 好子
生化学	山本 譲	新田 啓一	清水 栄	高田 淑江
生薬学	津田 喜典	西川 嘉廣	金田 幸	吉本 公浩
薬物学	五味 保男	百瀬 和亨	大橋 富次	荒起 清
微生物薬品化学	正宗 行人	伊藤 文昭	長谷 哲	浜崎美恵子
衛生化学	宮崎 元一	今成登志男	早川 和一	大久保 登
薬品製造化学	花岡美代次	今西 武	安田 信吾	市原 道枝
製剤学	山名 月中	辻 彰	宮本 悦子 中島 恵美	
薬品物理化学	伊藤 道也	長井 幸史(休)	谷本 能文	徳村 邦弘
薬品合成化学	藤井 澄三	板谷 泰助	斎藤 徹	大場 正志
生物薬品化学	大場 義樹	倉科 喜一	森川 明信	渡会 厚子
放射薬品化学	堀川 正克	鈴木 文男	渡辺 正己	森 俊雄
薬草園研究室	津田 喜典(併)	木村 久吉	(技能員)	下島 菊次 出村 健治
中央分析室		板谷 芳京	(技能員)	荒能由美子 大畑 桂子

第9章 薬学部

1981（昭和56）年10月に藤井学部長は任期満了となり、11月に大場義樹教授が第10代学部長に就任した。

1980年からの数年間も金沢大学では総合移転問題（後述）を中心にして紛糾が続いていた時期で、大学院博士課程の創設は依然として後回しになっており、薬学部としては重苦しい時代が続いていたが、その間にも薬学教育の再検討の努力が進められていた。（章末：附録9 - 1 - 3、9 - 1 - 4参照）

まず、この時期に交替した何人かの教授について記載しておく。

1980年4月に堀川正克教授が46才の若さで膵臓がんで逝去した。堀川教授は1969年6月に京大・医より着任して放射薬品化学講座を創設したが、ユニークな領域であり、学部の将来を担う人物であっただけに惜しまれてならない。

また、前年の1979年に附属病院薬剤部に配置換えになった山名教授（製剤学）の後任に1980年5月に辻彰助教授が昇格し、停年退官の高橋幸太郎教授（分析学）の後任に同年8月に山内脩教授が阪大・教養より赴任した。さらに堀川教授の後任には前に助教授として在籍していた二階堂修教授が京大・放射線生物研究センターから1981年3月に着任した。

1983年11月に大場学部長に代わり、五味保男教授が第11代学部長に選出された。さらに1984年4月には金子主税教授（薬化学）が1976年に宮田学術賞を受賞されるなどの多くの業績を残した後、東北大・薬に転出した。その後任には同年7月に染井正徳助教授が昇格した。金子教授には1996（平成8）年に金沢大学名誉教授の称号が贈られた。

（2）1975年のカリキュラム改正

2学科制発足の時に設定したカリキュラムに対し、学生からは各教科がバラバラで2学科制の思想がないとか、医療薬学が不十分な上、両科の単位数をそろえたためにカリキュラムが過密であるなど不平が多かった。そのため、1975年の全面改訂では2年の前期に薬品物理化学（3単位）、有機化学（3単位）、無機化学（1単位）、薬学概論（1単位）の講義8単位を繰り上げ、実習を15.2単位に縮少して過密カリキュラムを軽減するとともに本格的に選択制に取り組み、大幅に増設した教科をA、B2種類の選択科目に区分してそれぞれの必修単位数を定め、バランスのとれた薬学教育を実施しようとした（章末：附録9 - 1 - 2参照）。

（3）角間地区への総合移転

総合移転問題が発生したのは法文学部を文学・法学・経済学部の3学部に分離改組する計画が登場した1976年ころからであった。法学部を旧帝大以外に設置することは、既存の大学側よりの反対が強く、金沢大学の希望は民法の大家である中川善之助元学長の力を

もってしても実現していなかった。しかし国立大学での理系と文系学生の比率（7:3）の是正や、学生増を達成したいとする文部省の意向により、分離の可能性が生じてきた時期でもあった。薬学部では金沢大学の方針を斟酌し、日本海域の基幹大学への脱皮のステップになるならばとして、まず法文学部の改組に手を付けることに反対はしなかった。しかし学部が最も希望する博士課程設立の概算要求の順位を後にずらしたため、博士課程設立が大幅に遅れたことは否定できない（6-(1)参照）。

法文学部分離・改組のための調査費がついた1977年の秋になって、城内は史蹟保存の見地より永久建築は認められないことが明白となった。そこで新しい校舎敷地を城外に求めざるを得なくなった法文学部長より、単独キャンパスを構成することは能率が悪いことを理由にして、全城内学部の同一地区への総合移転を希望するとの表明があり、討論が繰り返された末、医学部を除いた全学部が総合移転への参加を決定したのは1978年11月の評議会であった。

この間、薬学部は大変に難しい決断を迫られていた。薬学は医学と密接な関係を保ちながら進む学問であり、人的な学术交流や研究機器を共通して利用することも多い上、特に医療薬学への積極的な参加を考慮に入れるとき、附属病院はできるだけ近くにあることが望ましいことはもちろんである。しかしその当時の薬学部の敷地面積は、薬学部が過去に医科大学の附属薬専であったためにあまりにも小さく、学生の福利施設や運動施設をとる余裕がない状態で独立学部の態をなしていない上、大学院ができて研究施設を建て増す余地さえ全くない状態であること、並びに既存の薬草園でさえ道路幅の拡張工事のために半分以上削り取られる計画が市議会で発表されたことも考慮された。さらに最大の懸念とされたのは、将来薬学部は5～6年制になる可能性があるが、その時になって校地が完全に不足して移転が必須になった場合、仮に適当な土地が見つけれられたとしても、学部単独で運営経費を無理なく出せるほど、薬学部は大きな組織ではないことであった。幸いがん研究所も、がん研究所附属病院と同じキャンパスにいたいという希望より総合移転に参加すると言っていただけに、薬学部の一層の発展のためにはこの機会を見逃すべきでないと判断して総合移転に参加することを決めた。

1995（平成7）年5月には、城内学部及び本部や各種の附属施設を含む91haの第1期移転が終了して第1期移転式典が挙行され、第2期移転用地として109haが同年取得された。薬学部においては大学院修士課程独立専攻の教官増や、学生定員の大幅な増員のため、研究施設面積の不足は更に切実となっている。薬草園面積の縮小も現実問題として登場してきているだけに、1日も早く移転が完了することを願うものである。

6 発展期：1985～1988年

(1) 大学院博士課程の設置

沿革のところ、北陸帝国大学の実現は幾度にも及ぶ努力のかいもなく挫折したことを述べたが、それに屈することなく薬系新制大学の最先端にあると自負していた本学部では、大学院博士課程の設置を学部の最大の目標に置いて機会あるごとに実現への努力が積み重ねられた。火災後の復興の見通しのついた1959（昭和34）年には平本学部長は早くも文部省への陳情を始めており、10月長崎で行われた薬学部を持つ新制6大学の事務局長会議では金沢、熊本の順で設置するとの同意が得られていた。

最初のステップとして1964年に大学院修士課程が設けられたが、戦前には東京、京都の2大学のみであった薬学系博士課程は、その後新設の九州（1950年）、大阪（1951年）、北海道（1954年）及び東北（1957年）の旧帝大系大学に次々と設立されていた。博士課程の有無が研究員の数や校費に大きく差を生じることから、博士課程を持たない大学の研究上での競争力の低下は現実の問題になっていたため、本学部にとっても早急な博士課程の実現は切実なテーマであった。しかし旧帝大系側が博士課程の拡大を内心望んでいないこともあって実現への壁は高かった。

一方、文部省の予算に縛られない公立・私立大学では、1964年に県立静岡薬大が新制ではじめて博士課程設立の認可を受けたのを嚆矢として、昭和40年代には多くの私立大学に博士課程が置かれつつあった。特に切実に感じたのは1975年秋に富山医科薬科大学が開設される時、新設の医学部と富山大・薬の合体が計画されたが、その合併に伴って薬学部にも博士課程が認められたことで（1978年に発足）、近い地区で競合している本学部としては致命的とも思われる打撃であった。

一方、1974年に大学院審議会が文部省に答申した「大学院及び学位制度の改善について」が高い壁となり、修士課程に引き続いて博士課程を設ける、いわゆる「積み上げ方式」が極めて困難になったことから、各大学は学内事情に応じた新しい構想を作ることを余儀なくされた。

考えられる第1の方式は、複数の学部または研究所の中から人員を出し合って新しい領域を作る方法であるが、千葉大・薬が生物活性研究所と合体改組する形で博士課程を目指しているとのうわさで、高橋学部長はがん研究所の協力を交渉され、友枝教授も本陣医学部長と話し合いをされたが、はかばかしい結果が得られなかった。山本学部長も1977年10月に工学部で海部、藤波、森の自民党文教委員会の各代議士に会ったり、薬学部長会議での決議をもって文部省に陳情を繰り返したが、1978～1979年ころには千葉大の薬学部

長だけが文部省の相談に乗ってもらおう始末で、本学部と発展の著しい千葉大・薬の文部省における評価が従来とは逆転しているのが感じられた（1979年、千葉大・薬は生物活性研究所と合体改組して博士課程を設けている）。

第2の方式は複数大学の共通した分野を専攻する教官が共同して学生の指導に当たる連合大学院方式で、関東と瀬戸内の農学系・水産系大学間で考えられていた。

第3の方式として1大学の全学部教官を再編成して有機的な連携のもとに十二分の能力を発揮しようとする総合大学院方式がある。これは共通した専門領域に属する教官の総力を結集して教育研究に当たるもので、本学でも1974年より友枝教授が委員長を務めた大学院問題専門委員会（初代委員長：理学部・青野教授）で検討された結果、この方式を採用することとなり、総合人文・社会科学研究所と総合自然科学研究所を設置する構想が1976年3月に確立された。このうち総合自然科学研究所は基礎科学、物質科学、生命科学、環境、エネルギー、システムの6専攻から構成され、薬学部の教官はその学問の性質上、生命科学に所属するとして話が進められた。一方、学部教授会ではほかの35大学はすべて積み上げ方式であり、ことさらに異なる方式を取ることの是非について懸念があるとして討論されたが、結論としてはこの構想が止むなしと了承されていた。

これと並行して1976年秋より、金沢大学は遅ればせながら将来計画を策定し始めたが、長い間改革の努力を怠っていたため学内に多くの難問を抱えていた。

まず博士課程設置の先に法文学部を文・法・経の3学部に分離することが、討論の末、評議会で決まった。また、この文・法・経3学部への分離はその関連学部との関係から、全学の総合移転（200ha）構想に拡大し、1978年11月に医学部を除く全学部移転の方針が評議会で了承されたが、この決定までに時間をまた空費する結果となった。さらに1980年には文・法・経3学部の分離・改組が実現したが、新キャンパスの移転場所の選定や移転順序の問題では各学部のエゴイスティックな行動もあって、評議会決定がなされないままに博士課程実現への作業は更に遅れていった。

この期間は博士課程のないことで研究員数はやはり少なく、校費の低迷で研究能力は他校に比べて相対的に低下しており、新制大学で発足した故の金大薬学部の苦しみであったといえる。

1984年4月には法文学部の文・法・経3学部への分離、教育学部と経済学部修士課程を設置すること、及び角間キャンパスへの移転問題等の多くの難問がやっと片付いた。それを受けて1985年4月、新制大学発足以来の悲願であった博士課程が薬学研究科の中に生物科学専攻として発足した。翌年よりは物質科学専攻とシステム科学専攻が順次増設されて、3専攻の自然科学研究所が1987年に完成した。なお自然科学研究所には、1995（平成7）年に地球環境科学専攻が、1997年に数理情報科学専攻が新設されて現在に至っている。長い間の懸案が初期の構想とは異なる形ではあるが達成され、ほかの薬系大学と制度的にもようやく肩を並べることになった。

(2) 3コース制カリキュラムの実施

1975（昭和50）年の改正にもかかわらず、本質的にすっきりしない2学科制カリキュラムに代わるものとして、カリキュラム委員会（委員長：伊藤道也教授）は化学系、生物系、医療衛生系の3コース制カリキュラムの具体案の作成に長年にわたり努力を重ねていたが、1985年6月の教授会決定を経て、どうにか新カリキュラムを1987年秋に進学した学生から適用することにこぎつけた。

広く深く学ばせたいとする要求がある一方、文部省からは卒業に必要とする単位が多すぎるという相反する指摘にこたえとともに、2学科制の特徴を明確にすることや、医療衛生関係の仕事に従事する学生の多いことなどの諸問題に対応するため実施されたものである。

このカリキュラムでは、いずれの学科とも薬学の専門教育を受けるための幅広い基礎科目と薬学固有の薬剤師国家試験受験に必要な専門科目（旧カリキュラムでは大部分が選択となっていた）及び実習（卒業研究を含め）は選択コースに関係なく共通必修とするが、3年次では化学系、生物系、医療衛生系の3コースに分かれて専門的な各系の選択科目を履修するカリキュラムである。卒業研究単位を20単位から8単位に改訂し、新たに2単位の演習をおいたが、この演習の代わりに医療衛生系の学生は2単位の病院薬学実習を履修することを定めた。その他、再試験は1回のみとして期間を定めて行うことや4年次への進級時に関門を設けて勉学を督促する一方、土曜日には原則として講義を行わないなど多くの点が改正された（章末：附録9 - 1 - 4参照）。

薬学部のカリキュラムについては、この改正後も1990（平成2）年には教育職員免許法の改正に伴って教員免許を取得するために必要とされる専門科目を廃止し、1993年には課程区分の廃止に伴って教養科目を変更しており、さらに1994年には4年一貫教育を実施するための改正を行うなど、小さな改正が社会情勢の変化に伴って施行された。

(3) 日本薬学会第105年会の開催

1947年と1963年に日本薬学会学術大会と日本薬学会年会が相次いで金沢で開催され、いずれも好評であったことは先に述べたが、1985年4月3～5日に久々に金沢で日本薬学会第105年会が開催された（組織委員長：山本讓教授）。

1968年より日本薬学会はGHQの指令で合体していた日本薬剤師会との合同開催をやめ、単独で薬学大会を開くことになったが、学会参加者が毎年増加の一途をたどったため、大都市以外では宿舎及び会場が用意できないこともあって大都市圏だけが担当していた。しかし当該都市圏の大学にのみ負担が片寄る結果、不平の声も高くなってきたので、1975年から全国の8支部が回り持ちで分担することに改められた（1サイクル内で関東支部は3回、近畿支部は2回を分担するので北陸支部は11年に1回開催を担当する）。北陸支部



写真9 - 8 日本薬学会第105年会

の都市で開催能力のあるのはまず金沢であるが、それでも宿泊施設の不十分なことなどのためにこの改正案に支部としては消極的であった。しかし岡山（99回）や熊本（101回）のように金沢と同規模の都市が引き受けることを決めたので、支部分担を強く迫られる状況となり、サイクルの最終年に開催したものである。北陸支部の打ち合わせ会で金沢大・薬が主力となり富山医薬大・薬と北陸大・薬の各薬学部が助ける形で実施することになった。金沢市としても今までにない大規模な学会なので全市を挙げての協力が得られ、この経験が翌年のコンベンション都市化の発足に連なった。また電々公社からも北陸にキャブテンシステムを導入する糸口を求めていたこともあって全面協力が得られたほか、市民講座をはじめで開催されるなど新しい試みも多く実施された。城内学部の教室をはじめとして観光会館、文化ホール、社教センター、産業展示館等々の市内の主要建物はほとんど使用された。参加者は8,500名に達し、天候に恵まれたこともあって盛会であった。

同窓会の懇親会は4月3日夜、センチュリー・プラザの「兼六の間」で開催され、同窓生の参加者200余名のほか、金子学長をはじめとして平本、塚本、桜井、吉岡、水野、荒田、亀田、友枝らの旧教官も多数出席され、徳久和夫（1955年卒）の司会で盛大な会となり、先生方にはささやかではあるが記念品をお渡しして感謝の意を表わすことができた。

（4）入学試験制度の変遷など

金沢大学では1978年まで一期校として入学試験を行っていたが、1979年からの共通一次試験制度の実施により国立大学はすべて一期校になったことから、受験者総数が定員の

第9章 薬学部

1.5倍までに落ち込む年もあって、入学者数が年により大きく増減する結果を生じた（図9 - 2）。

また、入学者の県別分布は志願者の指向や出題科目などにより、かなり変わってくるだけに捕まえ難いが、その範囲は北陸3県とそれに近接する新潟、長野及び日本海沿岸の各県や関東圏の山梨、群馬、埼玉及び中部圏の岐阜、愛知、三重と近畿圏の大阪、兵庫、滋賀、京都の出身者が多く、本学部の勢力圏が一応推定できる。また、昭和40～50年代では北陸3県50%前後（うち石川県25%）、その他50%であったが、平成以降では、北陸3県40%（うち石川県20%）、その他60%となっており、交通の便が良くなったためか、あるいは人口分布の変動のためか、その他の地域の比重が増している（図9 - 3）。

1987（昭和62）年より1989（平成元）年まではA、B日程制度が採用されたが、薬学部はA日程を採用することを決め、数学、理科（物理、化学）に強い学生が望ましいとして2教科3科目制が採用された。しかし受験者の入学手続きがB日程終了後の3月末であったために、手続きをする学生数がぎりぎりまで把握できない苦労があった。

1990年から共通一次試験制度は大学入試センター試験制度へ変更となり、分離分割制度が実施されたのに伴い薬学部でもこれを採用し、各学科とも募集人員を前期30名（帰国学生1名以内を含む）、後期10名とした。前期日程の個別学力検査として数学的センスは物理を受験させることで補えると考え、外国語を課すことで一般的な能力を知ることができるのではないかとの考えから理科（物理、化学）と外国語の2教科3科目制を採用した。後期日程の個別学力検査は平成2、3年には実施せず、大学入試センター試験の数学、理科、外国語の成績の良い者を合格させていたが、1992年以降は理科（化学）を課すことに変更した。

さらに1997年以降では授業の理解のためには数学、外国語ともに必要との意見が強くなり、理科の受験科目は物理、化学、生物の中から1科目を選択させることにして、前期個別学力検査では数学、外国語、理科の3教科3科目制を、後期個別学力検査では理科（化学）のみの入学試験を実施している。

入学生の資質による授業の理解度の問題や、志願者が受験科目の少ない私学を選ぶ傾向が生じたことなどもあって、薬学部の入学試験制度や受験科目は試行錯誤を繰り返しながら現在に至っているが、満足できる状態とは言えないかもしれない。今後さらに入学試験の多様化が求められているだけに将来の検討課題として残っていると言える。

次に、薬学部は教育学部と並んで女子学生が占める比率の高い学部と言われていることから、女子学生の入学状況について触れておくこととする。

終戦後の教育改革によって新制高等学校での男女共学による教育制度が普及するに伴い、薬学部への女子学生の入学者が急速に伸びてきた。薬剤師の資格を取得することができる上に、卒業後の活躍する領域が女子に適していると見えるためなのか、はたまた男子にとっては薬学部が他学部より魅力に乏しいためなのか理由は計りかねるが、成績優秀な女子が多く受験したので進学の領域が多方面にわたる男子学生数の減少は否めない事実となっ

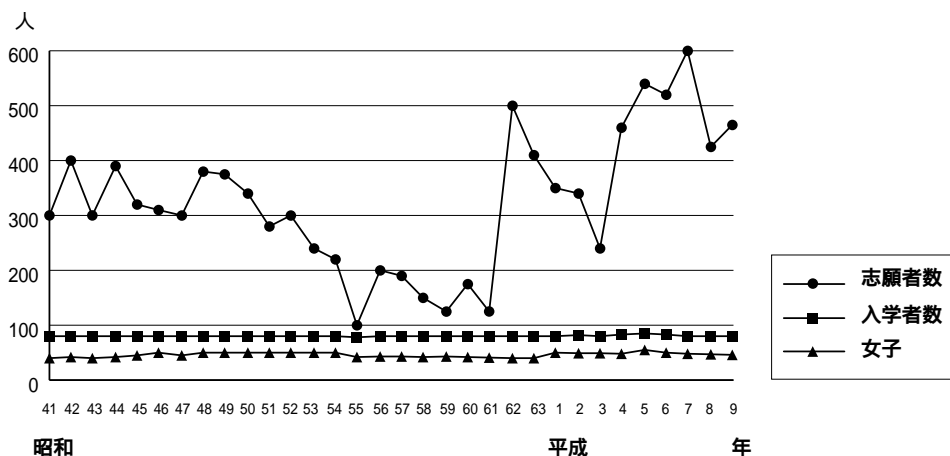


図9-2 受験者数の推移

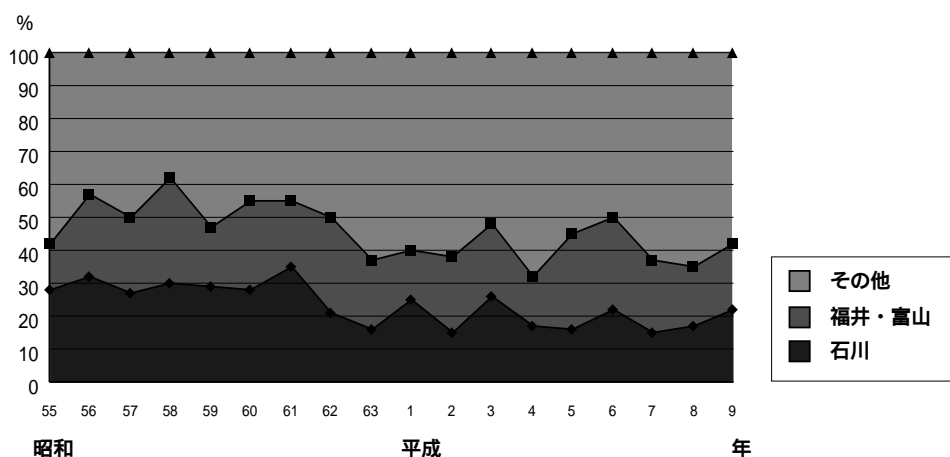


図9-3 入学者の出身県別推移

た。男女共学が実現して最初の1～2年こそ女子学生は珍しい存在であったが、3年目以降には早くも全学生の30%を超し、1960年以降は過半数に、さらに女子の進学率の上昇もあって1965年には70%以上に達した。社会的な貢献度の観点より女子学生亡国論が企業やほかの大学で叫ばれたのはこのころのことである。1967年に2学科制が実施されて入学定員が80名になり、製薬化学科は企業で働く人材の養成を目標とすることを強調した入試案内を作ったこともあって、当初には女子学生の入学率が幾分減ったが、それでも薬学科はほとんど女子学生で占められたことから、全学生の50～70%を女子学生が占める状態が1985年ころまで続いた。最近では薬学科、製薬化学科とも入学者の数に男女の差がほとんど無くなり、総計では約半々になっている。

なお、入学試験制度と直接の関連はないが、ここで薬学部卒業生の進路の変遷についても述べておきたい。

第9章 薬学部

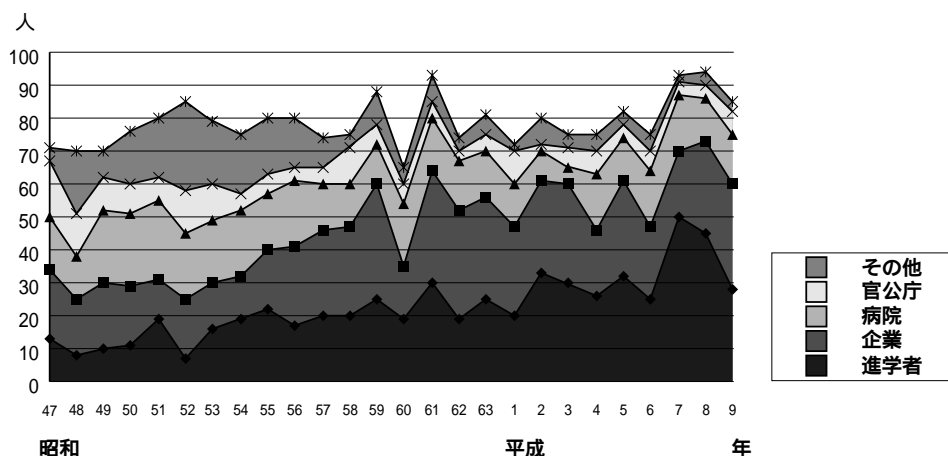


図9 - 4 薬学部卒業生就職・進学状況

平成時代に入り大学院進学者が増加したために、新卒業生の就職域の分布が変化した。最近10年間の進路状況は図9 - 4に示すように、更に高度な研究を目指して進学する者、教育者となる者、国公立の行政・研究機関や保健所に就職する者、病院、薬局、製薬会社あるいは化学工業、化粧品、食品分野に就職する者など多方面に進出し活躍している。

1987（昭和62）年4月に山内脩教授（薬品分析学）が名大・理へ転任になった。錯体の化学が生命機構の解明に大きく関与していることが判明しつつあった時期だけに、学部としては惜しい転出であった。山内教授の後任には10月に島田和武教授が東北大・薬より赴任した。

同年10月末に五味学部長は任期満了となり、第12代学部長に花岡美代次教授が選ばれた。

1988年3月に山本讓教授（生化学）及び木村久吉助教授（薬用植物園）が停年退官になった。後任には大熊勝治教授（帝京大・薬より）と御影雅幸助教授（富山医薬大・和漢薬研より）が、いずれも7月に赴任した。

7 平成の時代：1989～1997年

（1）薬学部教育研究白書の刊行

かねてより薬学部評価検討委員会（委員長：染井正徳教授）で検討していた結果がまとめ、『薬学部・大学院薬学研究科教育研究白書』が1992（平成4）年5月に刊行された。本書は、第1部総論、第2部学部の現状、第3部各講座・研究室別研究業績概要から成る

が、学部はどのような理念で教育をしているか、どのような研究を行い、また国内外の学会でどのような活動をしているか、そして学部卒業生や大学院修了生がいかなる分野で活動しているかを広くアピールする必要があるとして作られたものである。

総論では、組織体としての学部の評価、学部を構成する教官の評価、教育充実と研究の推進を支える上で根幹となる人事について述べられている。

では有機化学、物理化学、生物科学のレベルの高い基礎教育の上に、本学部の教育目標に合わせた3つのコースによる授業科目と、1年間の卒業研究からなっている現カリキュラムについて記述するとともに、従来よりの「一般教育」と「専門教育」とのかかわりを学部一貫教育の立場で再検討することが必要であると述べている。

では教官の独創性が最も評価されるべきであるとしているが、特に講座研究費は年間800～1,000万円前後が必要とされるのに対し、光熱・水道料や図書費等の中央経費が講座費の半分を占めるために350万円前後しかなく、経常的教育と研究を行うために科学研究費や委任経理金の獲得に奔走しているのが現状であり、設備機器の更新の困難なことや教務職員の奨学金返済義務が次世代教官の大学定着を妨げていると書かれている。

学部の財政事情に関しては過去5年間の学部全体の収入と支出の推移について解析が行われているが、図9-5は更に長期の推移を示す一つのデータとして、学部の年度当初予算とその中に占める講座配当額及び図書費の推移をまとめたものである。作成の根拠となった数値が年度当初予算であることと、大学院博士課程にかかわる予算や年度半ばで配当される予算、科学研究費、委任経理金などが含まれていないために必ずしも実態を正しく反映しているとはいえないが、学部配当予算が着実に増加しているにもかかわらず講座配当額が1972（昭和47）年をもって頭打ちとなり、その後はむしろ減少傾向にあることが読み取れる。また図書費の増額が顕著で最近講座配当額に匹敵するまでになっている。しかしながら1985年に大学院博士課程が設置されたことにより、実際の講座配当額は図9-5に示されている額のほぼ倍となっていることも忘れてはならないことである。

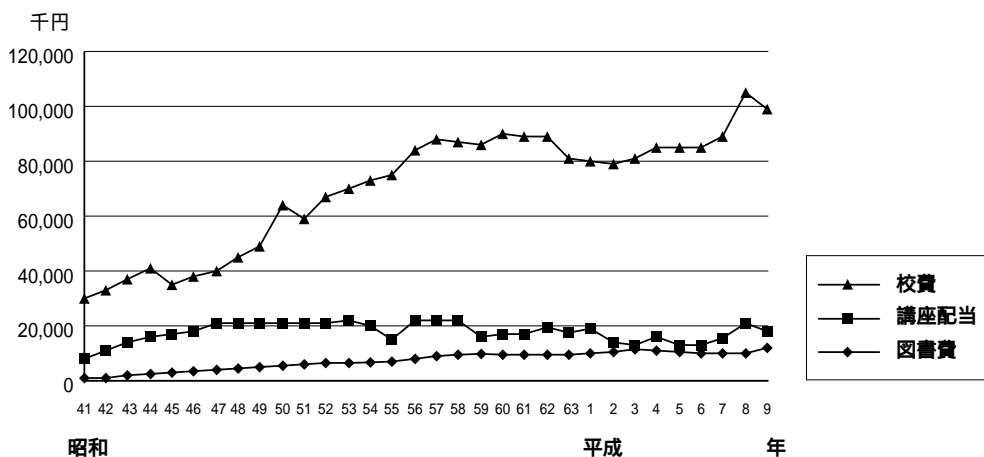


図9-5 薬学部当初配当予算

については、学部の活性を高めるために、教官の人事異動は選考委員会における繰り返し討議と投票で決定し、機械的な助教授からの昇格や特定の教官からの推薦などは全く考慮されていない現行制度が良いとしている。

結論として校費予算の増額、研究施設・機器の更新、研究者の待遇改善が必要であると指摘するとともに教官の厳しい自己点検と自己改革も求められると述べられている。

(2) 教育改革

1996(平成8)～1997年は21世紀を迎えるための平成の教育改革ともいえる脱皮が、学部及び大学院レベルで同時に進行した時期であった。まず手始めとして1996年に薬学部は大講座制に移行するとともに、大学院修士課程に医療薬学専攻を新設し、学部及び修士課程のカリキュラムを大幅に改訂した。さらに1997年には薬学研究科(修士課程)を解消して理学研究科及び工学研究科と一体化した自然科学研究科前期課程に改めた上で、後期3年独立課程の博士課程とドッキングして、新たに前・後期の両課程を有する区分制大学院に編成替えをした。

学部レベルでの改革

先進国(特に欧州)では薬剤師が自らの職能と社会的地位を確立するために、健康維持と疾病治療に貢献する目的指向型の応用科学として薬学を確立し、薬剤師養成を薬学教育の第一義に設定して後継者養成を行ってきたのと対照的に、我が国の薬学は、薬そのものから逃避する姿勢を持つことが、俗物化しない純粋な薬学研究者であり教育者であるとする風潮すら存在していたくらいに純正科学優位のアカデミズム的な色彩が強く、医療に関する教育は軽視されてきた。これは第二次大戦後に米国調査団の勧告で有機化学一辺倒の薬学部(科)に生物化学と物理化学が導入された後も本質的に変わらなかったと言える。

1964(昭和39)年4月に日本薬学会の薬学研究長期計画委員会がまとめた薬学研究白書では「創製、生産、管理を目標として、これに必要な基礎学を動員体系化した総合科学が薬学である」とし、「基礎学は有機化学と生物化学及び物理化学を主たる柱とする」としたが、その後の展開は薬学を基礎の三本柱で支えられた純正科学の殿堂にすることに熱心で、主役であるはずの総合科学がかすんでしまっていた。この傾向は金沢大学薬学部においても同様であったと言える。

しかし、この独善は平成の時代に入って国際的調和の立場からの圧力に加えて、法的・社会的にも変革を厳しく迫られることになった。具体的には、1992年の医療法の第二次改正で薬剤師が医療チームの一員としての権利を得たこと、1994年の「医薬品の適正使用」を踏まえた薬事法、薬剤師法の改正で薬剤師が医療に関する情報公開の義務を負ったこと、及び製造物責任制度の法制化で医薬品という製造物にかかわる企業と薬剤師の責任が厳しくなったことなどを挙げることができる。すなわち、薬剤師に必要とされる情報と

知識の量が莫大になり、質の向上とともに人文社会科学までを含めた高度な専門的知識が要求されることになったのである。

さらに厚生省「薬剤師養成問題検討委員会」からは、「薬剤師国家試験受験資格を与えるための高等教育期間を6年とし、その中に6ヵ月以上の卒前病院実務実習を含める」新制度を遅くとも今世紀中の大学入学者から適用すべきであるとする答申が出たこともあって、医薬分業が難しかった事情から薬学の教育・研究が薬学部という限定された空間に閉じこもって医療現場と乖離していた状態からの脱却を目指して、教育体制の本格的な変革が必至な情勢となってきた。

これらの社会的要請にこたえるために、各大学の薬学部はその対応を急いでいたが、本学部においても、今後養成すべき人材には、「創薬・製薬」「医薬品の適正使用」「公衆衛生」の各部門で専門職としての能力のほか、それまでは軽視されてきた「医療と情報」に関する専門的知識・技術が求められているとする、基本的立場に立脚した薬学教育改革が真剣に追求されるようになった。特にこの教育改革の中では、日本薬学会の研究白書に掲げられている「総合科学」と、それを支える「基礎科学」のいずれか一方をないがしろにすることは許されないことは当然のこととして、あわよくば有機化学・物理化学系講座と生物科学系講座の二つの体系を二つの学科に対応させて整理するとともに、医療薬学教育の充実と近い将来薬剤師国家試験受験資格取得の条件になるであろう事実上の学年延長への対応、さらに卒前病院・薬局実務実習の必修化が求められることも視野に入れて、学科の特色を出しながら、様々な領域で活躍できる薬学研究者・医療従事者の養成のための均衡の取れた教育を行うことなど、盛りだくさんの要求にこたえることを目標にカリキュラム改正が進められた。

具体的には、薬学教育の中で医学・医療に関する教育と実習が極めて乏しかったのは覆い難い事実であることから、まず医療薬学教育研究体制の整備を図ることとした。しかしながら、その当時は学部内に講座を新設することが極めて困難であると判断されたことから、後述する「医療薬学専攻」を大学院薬学研究科に設置して、学部学生の医療薬学教育に対する助力を願うとともに、学部・大学院のカリキュラムを大幅に改訂した（章末：附録9-1-5参照）。

このカリキュラムの特徴は、以前の3コース制カリキュラムを廃止して2学科制に戻し、それぞれのコースの必修・選択科目を規定したことにあるが、その一方では他学科の科目も履修できる学科間の自由選択科目も設けられている。また全員に対して医療薬学演習と病院実務実習が必修科目として課せられており、4年次にそれぞれ約1ヵ月にわたって行われることになっている。また、卒業要件として必修科目75単位、選択科目20単位以上の修得が要求されている。

次に組織改革では1996年における教養部の廃止に伴い、4名の教官を受け入れることになったが、講座の新設はできないので大講座制への改組の中で定員の配置を行うことにした。これまで教授・助教授・助手・教務職員各1名の4名構成であった13の小講座を、

第9章 薬学部

教授・助教授・助手各1名を基本単位とする教育研究分野に組み直し、その集合体である6大講座を、薬学科（薬効動態学、衛生分析科学、分子細胞薬学）、製薬化学科（医薬品化学、創薬資源学、活性相関物理化学）にそれぞれ3講座ずつ配置した。また医薬品化学の中に新しい教育研究分野として薬物代謝化学を創設した。これにより有機化学系・物理化学系講座と生物科学系講座の二つの体系を二つの学科に対応させて整理することができた（表9 - 4参照）。

大学院医療薬学専攻の創設

1996（平成8）年大学院薬学研究科に独立専攻「医療薬学専攻」が設置された。医療薬学専攻は「合理的な薬物療法を追求し、医薬品の適正使用を進め、患者のQOL（Quality of Life）の向上に貢献できる高度な知識と素養を持った医療チームの一員としての薬剤師の養成と医療薬学に精通した研究者・技術者の養成」を目的として設置されたものであり、学部学生の医療薬学教育にも助力を願うことを含めて医療薬学専攻を設置した経緯がある。この医療薬学専攻の新設に際しては、薬学部やがん研究所及び医学部附属病院薬剤部の各教官が五つの協力講座を構成して参加し（表9 - 5参照）、基幹講座である医療薬剤学講座の専任教官（教授・助教授・助手各2名）とともに教育研究に当たることになった。

また医療薬学専攻の入学定員は既設専攻からの振り替えを含めて24名が認められ、薬学研究科修士課程の入学定員26名が一挙に46名となった。このことから、質の高い薬剤師の養成が国家的事業として推進されていたことをうかがい知ることができる。

大学院自然科学研究科博士課程の改組

自然科学研究科の博士課程は1987（昭和62）年に独立性、学際性、総合性、地域性を設立理念として掲げ、後期3年の博士課程のみを置く新しい独立研究科として設置されたことは先に述べた。しかしながら設置後10年を経過したことと、その間に地球環境科学専攻（1995年）と数理情報科学専攻（1997年）が新しく設置されて5専攻に充実整備されたこと、さらには設置以降の自然科学の変革、技術革新の進展、社会的諸状況の変化に対応するため、改めて初心に戻って学際性、総合性、創造性に富んだ高度の技術者・研究者の養成を図るべく、修士課程と博士課程を通した5年一貫の教育が可能となるような組織への改組が行われた。

この改組は自然科学系教育研究分野の学際化・総合化に応じられるように横断性を強めるとともに、修士・博士両課程における教育研究のより一層の連続性・継続性を図るために実施されたもので、既設の薬学研究科（修士課程）は学年進行中の医療薬学専攻を含めて、1997年に発展的に解消して自然科学研究科に移行し、前期・後期の両課程を有する区分制博士課程に編成替えされることとなった。

医療の現場はもちろん、創薬・製薬・公衆衛生を問わず医薬品を介して人の生命と直接的なかかわりを持つ薬学研究者・医療従事者には、薬業経済、患者心理など人文社会科学

表9 - 4 大講座制に移行後の学部講座の編成と教官陣容 1996(平成8)年4月1日現在

学科名	現講座名	旧講座名	教官配置		
			教授	助教授(講師)	助手
薬学科	薬効動態学	生物薬品化学 薬物学	大場 義樹 五味 保男	中西 義信	[松川 通] 牛島ひろみ 木下美佐子
		製剤学	辻 彰	玉井 郁巳	崔 吉道 河原 昌美
	衛生分析科学	衛生化学 薬品分析学	島田 和武	[早川 和一]	木津 良一 安藤 京子 三田村邦子 東 達也
製薬化学科	医薬品化学	微生物薬品化学 放射薬品化学	正宗 行人 二階堂 修	山下 克美	安川 洋生 松永 司 石垣 靖人 荒井 国三 横山 謙
		生化学 運動生化学(新)	大熊 勝治	北浦 孝	
	創薬資源学	薬品構造化学 薬品合成化学 薬物代謝化学(新)	花岡美代次 石橋 弘行 横井 毅(1997.4.1)	向 智里 板谷 泰助	杉本 雄一 大場 正志
附属施設	薬用植物園 元素分析室	生薬学	津田 喜典	西川 嘉廣	[木内 文之] [細井 深造]
		薬化学 薬品物理化学 結晶物理化学(新)	染井 正徳 伊藤 道也 関崎 正夫	山田 文夫 (講師) 中垣 良一 大崎 晃三	中川 享子 徳村 邦弘
				御影 雅幸 高荷 昌子(講師)	

[]は大学院自然科学研究科生命科学専攻に所属

表9 - 5 医療薬学専攻の編成と教官陣 1996年4月1日現在

組織	講座名	教授	助教授(講師)	助手 (1992.4.1.)
基幹講座	医療薬剤学(専任)	宮本 謙一 鈴木 永雄	横川 弘一 清水 栄	野村 政明 成橋 和正
協力講座	薬効解析学(薬学部)	五味 保男 二階堂 修	玉井 郁巳 松永 司	(1997.10.1.)
	病態薬理学(がん研究所)	佐々木琢磨 松島 綱治	田中 基裕 向田 直史	
	分子医療科学(がん研究所)	原田 文夫 清水 元治	黒木 和之 田中 淳之	
	臨床薬学(附属病院薬剤部)	市村 藤雄	中島 恵美	

第9章 薬学部

にまで及ぶ様々な素養が求められる。このことは、総合的視野を付与することを目的に設置された自然科学研究科と薬学部の教育の理念が一致することを意味する。また社会人のための入学者特別選抜や昼夜開講制を実施して、社会人の大学院での学習を容易にすることもその目的の一つとなっている。

1997年現在、大学院の入学定員は博士課程前期の生命薬学専攻39名、医療薬学専攻24名の計63名であり、博士課程後期の生命科学専攻の20名を加えて、学部学生に対する大学院学生の比率が非常に高くなっている。

(3) 日本薬学会第116年会の開催

日本薬学会第116年会（組織委員長：花岡美代次教授）が1996（平成8）年3月27～29日の3日間、11年振りに金沢で開催された。今回は富山医薬大薬学部か北陸大薬学部が当番のはずであったが、いずれの大学も辞退したのでやむなく本学部が引き受けることになり、ほとんど本学部の教官だけで年会在が運営された。

特別講演、シンポジウム、一般講演を含めて演題数は3,300以上に達したが、そのほとんどは口頭発表であったため、会場数は53ヵ所も必要になった。金沢大学の総合移転のために城内が使えなくなったことから、角間キャンパスを主会場にして、県・市などの公共施設や宝町キャンパス及び小立野（工学部）キャンパスなどかなり離れた場所も会場に使用しなければならなかったため、角間キャンパスのPRに一役買うことになった反面、参加者を移動させるためのバス輸送に苦心が払われた。幸い天候にも恵まれ、全国から9,000



写真 9 - 9 日本薬学会第116年会講演集

人を超える参加者を得て「21世紀の薬と薬学」をテーマに盛大に開催することができ、最先端の研究から教育問題まで活発な討論が展開されて実り多い年会となった。

講演要旨の印刷に電子写植を採用したので、字体が統一されて読みやすい要旨集ができたことや、要旨集のCD-ROM版をはじめて発刊し、データベース化と相まって情報化時代に沿った一歩をしるすこととなった。

また本年会は薬剤師研修センターの研修会として認定されたこともあり、3月26日のサテライトシンポジウム、30日の市民講演会も盛況で、地域薬剤師や市民の生涯学習にも大いに貢献することができた。

同窓会の懇親会は3月27日夜、薬友会石川県支部長川崎直司（1954年卒）の主催でホリデイ・イン金沢で開催され、200余名の同窓生が参加して楽しい会を持った。しかしながらその反面、旧教授で出席されたのは吉岡・水野両先生のみであり、前回の同窓会を思い出すにつれ、11年間の年月の長さが痛感された。

(4) その他

平成の時代に入り学部内で起こったその他の事項について記す。

1991年10月、花岡学部長は任期満了となり、第13代学部長に宮崎元一教授が選ばれた。

1987（昭和62）年秋から薬学部では土曜日には原則として講義を行わずに、特別講演会などの行事に充てていたが、1992年5月から正式に学部を挙げての週休2日制を実施した。

1993年10月、宮崎学部長は任期満了となり、第14代学部長に大場義樹教授が再び選出された。

1995年3月、藤井澄三教授（薬品合成化学）が停年退官になり、その後任には10月に石橋弘行教授が京都薬大より赴任した。

同年10月、大場学部長は任期満了となり、第15代学部長に二階堂修教授が選出された。

1996年3月、宮崎教授（衛生化学）が停年退官になり、その後任として8月に早川和一助教授が昇格した。

同年4月、大場教授は学生部長を兼任することになった。

同年10月、薬学部学協会が発足した。全学で最も規模の小さい部局の一つである薬学部では、山積する種々の課題に学部全体で一致協力して取り組む必要があったためである。それまで学部運営への直接的関与の少なかった助教授・講師層に積極的な参加を求めて学部運営の活性化を図ることをも目的として学協会が設置された。設置後2年未満の現段階で、学協会設置の効果を判定し得るには至らないが、学部内の情報伝達が極めて速やかになったこと、及び学部の当面する問題点や将来構想などに関する討議の場が広がる結果を生んだことは特記するに値する。

1997年3月、伊藤道也教授（活性相関物理化学）及び津田喜典教授（創薬資源学）が

第9章 薬学部

停年退官した。後任として5月にそれぞれ中垣良一助教授の昇任及び太田富久教授（東北大・薬より）の赴任により補充された。

同年4月には新設講座である医薬品化学講座に横井毅教授が北大・薬より赴任した。

1998年3月、大場教授（薬効動態学）が停年退官した。

8 将来展望

折からの不況や、財政構造改革、行政改革の論議が進むなかで、大学のあるべき姿についても議論が喧しい。国立大学の民営化など大学を学問の場から営利企業へと変貌させるべきとの論議すら聞かれる今日このごろである。大学の置かれている立場はこれまでになく厳しい。加えて少子化が進行し、近い将来に入学定員を受験者数が下回ることすら予想されている。果たして50年後に金沢大学は現在の形で存続し得るであろうか。その可能性はあまりにも低いとすら感じられる。薬学部が存続するためにいかなる変貌を遂げるべきであろうか。いかなる特徴を持つ大学・学部として存続すべきか。このような長い時間軸での将来構想に関する学部内での論議は、残念ながらほとんどなされていないのが現状である。しかしながら、本節の表題にまったくこたえない内容では、読者の要請に正対しなかったという謗りを免れない。そこで、現状の問題点を整理し将来展望を述べたい。

（1）薬学の理念

薬学は医薬品の創製、純度と安全性の確保、適正使用に加えて、人々の健康保持（衛生）並びに疾病の予防・治療に貢献する科学として発展してきた。近年の生命科学領域における爆発的な新知識の集積は薬学領域へも多大な波及効果を及ぼし、その急速な発展を促している。薬学は生命体や薬物に対する理解を求める基礎科学としての側面と、薬物の生体への影響の評価とその応用にかかわる科学としての二側面を併せ持つ多様な学際領域を包含する科学領域であり、その一方で薬物を通じて社会と密接に関連する領域でもある。これらの領域をその教育・研究の背景とする金沢大学薬学部は、創薬科学、薬物の有効・安全性の確保、環境保全科学に関する教育・研究を推進するとともに、医療人としての薬剤師養成教育の推進をその理念としている。この理念の下に、本学は社会の進歩・発展並びに人類の福祉の向上に貢献する研究者、技術者、及び薬剤師の養成に邁進している。時代の要請に応じ、これらの理念の中で強調されるべきものが変化する可能性はあるが、金沢大学薬学部の理念そのものは不変であろう。

(2) 角間地区への移転

角間地区への第2期総合移転は、当初の予定よりいささかの遅れを見せてはいるものの、移転が次第に現実のものとなりつつある。角間地区第2期総合移転事業において、移転予定の各部局のなかで薬学部棟が最初に角間地区西キャンパスに建設される予定である。次いで工学部、自然科学研究科の各棟が、最も遅れてがん研究所が建設される。しかし折からの財政構造改革の影響などで、移転順位や規模などに多少の変更のあることが予想される。

2002(平成14)年以降とされる薬学部の角間移転に際して、薬学部教官の研究室はすべて自然科学研究科棟に移る構想が進展しつつある。このためには自然科学研究科棟は薬学部棟と時期を同じくして建設されることが望ましい。薬学部教官が自然科学研究科棟に研究室を持つことは将来の大学院重点化への布石であるから、それに応じて薬学部の教官すべてが自然科学研究科の専任教官たり得るレベルまでに教育・研究のレベルを高めるという責務を自らに課すことを意味する。研究室移設の結果、薬学部は講義室や学生実習室及び学生の集会室と事務室のみから構成されることとなり、現在の宝町キャンパスの薬学部棟よりも小さな規模となるであろう。教官は自然科学研究科棟から薬学部棟に講義や実習指導に出向き、一方、4年生は卒業研究を自然科学研究科棟内の教官研究室で行うという構想が練られている段階である。

角間移転後の研究支援体制について述べたい。薬学の研究領域は極めて広範囲にわたるため、研究に必要な諸施設も多岐にわたる。薬学領域では時代の趨勢を反映して遺伝子治療や遺伝子薬などに関する研究が盛んである。また、病因追求のための各種の遺伝子のクローニングは、今や日常茶飯事となった。このため、全学共同利用施設である遺伝子実験施設の角間西キャンパス地区への移転が是非とも必要である。第2の施設として特殊動物実験施設の建設を挙げたい。マウスやラットという薬物の効果検定に日常的に使用されている動物のみならず、遺伝的背景の明らかな各種の動物並びに各種の免疫欠損動物やトランスジェニック動物などの維持・実験に必要なクリーンな飼育環境の整備された施設は、薬学部の研究活性を維持するためにも欠くことができない。第3の施設として放射性同位元素実験施設がある。放射性同位元素は生体内トレーサーとして用いられ、薬物の分布測定や代謝研究に欠くことのできない技法である。本施設の機能をほかの方法で代用することができないので、放射性同位元素を実験に利用できる管理区域を薬学部の周辺に設置する必要がある。第4の施設として機器分析センターについて述べたい。角間西キャンパスへの移転に際し、全理工系学部より機器を持ち寄って機器分析センターを自然科学研究科に付置するという形で設置する動きがある。これまで各部局ごとに分かれ重複して同一機器を設置していたものが、センターの設置によって無駄を省き、より高額な最先端の機器を設置することも可能となる。センターに配置された専任教官により分析機器の使用に関する教育が円滑に行え、高度な機器分析サービスを提供できる利点がある。またセンター

は、地域の企業や公共団体の分析依頼に対応するとともに、新しい分析機器の開発という創業につながる活動をも行えるようにしてはどうであろうか。薬学部も手持ちの機器をセンターに移管したり、あるいは教官のセンターへの配置換えなどで協力すべきであろう。

これら研究支援施設の角間西地区への移転や設置計画に関して、1997年度後半より、全学の総合移転実施特別委員会委員長に就任した辻彰薬学部教授の指揮の下に全学的合意が形成されつつある。辻教授の労を多とし、薬学部も一致協力してそれらの実現に努力したい。

(3) 薬学における研究

薬学における研究領域は極めて多彩である。薬学には医薬品や生理活性物質などの機能性分子、それらの作用を受ける生体に加え、両者の相互作用を主たる研究対象とする三つの研究方向が存在する。薬学はこれらの研究成果を人類の健康維持・環境保全と疾病の病因解明・予防・診断・治療に生かす科学領域である。

1996年度に従来の2学科13小講座制から2学科6大講座制に移行した。すなわち現在の薬学科は薬効動態学、衛生分析科学、分子細胞薬学の3大講座から、一方の製薬化学科は医薬品化学、創薬資源学、活性相関物理化学の3大講座から構成されている。大講座制への移行に伴い、従来の小講座の壁を越えた新しい学際的研究が芽生えるものと期待され、学部としてもプロジェクト研究を新設し積極的に育成したい。

教育のレベルを高めるためにはレベルの高い研究を行うことが必要であることは言をまたない。ではいかにして研究のレベルを高く維持していけばよいであろうか。研究内容の高度・先端化はそれに従事する個々の研究者の資質に依存するところが大きいが、前述の薬学の理念を具体化し、社会に研究成果を還元する義務を負う国立大学教官の立場を考慮すると、我々薬学教官は研究の意義や成果を一般市民の理解が得られる形で公表し、それに対する評価を受けなければならないと考える。成果の公表はそれ自身外部評価であり、研究経費を文部省科学研究費補助金から得ることも外部評価にほかならないが、薬学部の理念並びに将来構想を踏まえ薬学研究のレベルの質的向上のために、早急に全学部的な外部評価を導入する必要がある。

薬学の教育・研究の発展のためには各種の施設の充実と高度化が必要である。本学部では薬用資源総合教育研究施設、並びに最先端医療薬学教育研究施設を1998年度に概算要求している。前者は薬用植物園を拡大発展させた施設であり、栽培技術開発、資源探索解析、資源応用教育研究の3部門から成る。さらに圃場や温室、見本園を備える。本施設は学生に対する教育にとどまらず、市民へも開放して地域社会の発展に貢献することを目指している。後者の医療薬学教育研究施設は薬物療法設計開発、病態分子制御、分子機能制御の3部門から構成される。本施設には医療薬学実習施設が含まれ、学生の病院実務実習の前教育の場として活用する。このように現在概算要求中の2施設は薬用資源研究あるいは

は医療薬学研究領域の確立に必須であるとともに、学生へ新しい教育の場を提供するものである。薬学部の将来的発展に大きく寄与する可能性が大であり、早急な設置を望みたい。

(4) 大学院重点化構想

薬学部の教育・研究についての近未来の展望を述べる場合、自然科学研究科の将来構想抜きにしては語れない。1997(平成9)年4月には、それまでの大学院薬学研究科修士課程の薬学・製薬化学の2専攻が大学院自然科学研究科博士前期課程の生命薬学専攻へ移管され、医療薬学専攻はそのままの名称で、これまた大学院自然科学研究科へと移管され、ともに薬学部の手を離れた。また、1998年4月には自然科学研究科博士後期課程の再編成により、研究科専任教官が学部教官の振り替えと1名の純増により大幅に増員された。この博士後期課程の再編成は、近い将来に金沢大学を大学院重点化大学として位置付ける布石の一つと捕らえねばならない。今後は薬学部全教官の大学院自然科学研究科専任化を目指し努力したい。大学院重点化とは、教官が大学院博士課程の専任となり、高度な専門的教育・研究を行うことを目指すことである。大学院重点化の目標へ到達するためには、教官自らが最先端かつ高度なレベルの研究を行うことが求められ、国の厳正な審査を受けてはじめて認可されるものである。これまでに旧帝大系大学や東京工業大学などで重点化が完成しつつあるが、金沢大学が向後50年を生き延びるためには、是非とも大学院重点化を完成させることが必要である。一方、重点化が完成すると薬学部の専任教官は存在しなくなり、薬学部の講義や実習は自然科学研究科専任教官が兼務して担当することとなる。

(5) 薬学部入学試験制度の改革

近い将来に予測される少子化に伴う受験者の減少に薬学部が直面することは確実である。また、高校におけるゆとりの教育や教科目選択制の実施によって、高校生の履修内容が多様化しつつある。このような現状にあって薬学研究者や技術者、薬剤師を育てるためには、レベルが高く、薬学に方向付けられたより多くの

第10回 楽しい薬学部への一日体験入学!!

主催：日本薬学会(北陸支部)
後援：石川県教育委員会
富山県教育委員会
福井県教育委員会

★とき★
平成8年8月6日(火)
(10:00~16:30)

ところ
金沢地区：金沢大学薬学部または北陸大学薬学部
富山地区：富山医科薬科大学薬学部

内容
1) 講義 20分 ●薬学とはなにか？
2) 実験体験 ●約6時間
実験コースに数々ずつ配属し、大学の研究の一環に慣れてもらいます。
対象：高校1~3年生の方

実験コースお申し込み方法等の詳細は、校長先生または進路指導の先生にお聞き下さい。

■一日体験入学係■
金沢大学薬学部、創薬資源学講座内 ☎(0762) 34-4453
富山医科薬科大学薬学部、臨床分析学講座内 ☎(0764) 34-2281 内線 2615

写真9-10 「薬学会北陸支部の一日体験入学」ポスター

第9章 薬学部

受験生を集めることが重要である。そのためには、入学試験に面接や学士編入学制度、あるいは社会人の学部入学制度などを導入するなど、入試制度を多様化することを考慮しなければならない。さらに、高校生の薬学への動機付けとして、現在行われている高校生を対象とした体験入学を更に充実させる必要がある。また、薬学部教官が高等学校へ出張し、講演などを通じて薬学の意義や薬学を学ぶことの楽しさを高校生に直接語り掛けることも重要である。

(6) 薬学部教育

金沢大学では1993年度に、従来の一般教養課程と専門課程の課程区分が廃止され、教養部における留年制度が廃止された。次の年の1994年度には4年一貫学部教育が開始されるとともに科目区分が再編成され、学生が一年次から専門教育に触れることが可能となった。さらには教養教育に全学の教官が参加する体制が整えられた。これらの変革により、薬学部においては新生に薬学の理念や意義に触れさせる機会を得、彼らの興味と能力を早期に啓発することが可能となった。

入学した学部学生に対する教育方法の不断の改善は、若く勉学の意欲に燃えた学生に薬学部の理念を植え付け、その意義を知らしめるためにも是非必要である。その意味で授業に対する学生や第三者による評価などを導入したり、外部講師を招いて教育技術のノウハウを導入することも必要である。

薬学部卒業が薬剤師国家試験受験資格を取得できる唯一の条件であることから、薬学部における専門課程のカリキュラムは、その時々国家試験の内容によりしばしば制約されるのが現状である。確かに1996年度から国家試験に医療薬学関連問題が多数出題されるようになった。本学部でも10年前のカリキュラムに比較し、1998(平成10)年の現在のそれには医療薬学関連教科目が増加している。薬学教育において必要な専門教科目に加え、社会的要請の強い教科目を新たに加えるなど不断のカリキュラムの見直し作業が必要である。一方、前述のように薬学部卒業が薬剤師国家試験受験資格を得る要件であるため、学生は多数の教科目を修得しなければならないが、このことが学生に対し多大の負担を課していることも事実である。その意味で教官は個々の教科目の内容の見直しや効率的教育を行うなどの努力をしなければならない。

(7) 薬学の社会への貢献

薬学部教官の熱意と努力によって、大学教育開放講座が市民を対象として開催されている。くすりや健康に関係した話題が多く提供され、毎回50人以上の受講者を集めるなど人気が高く、地域社会への薬学部の貢献策の一つとして今後も継続することが重要である。これら一般市民向けの講座以外に、薬学を卒業し現場で活躍している地域の薬剤師を対象

として、薬学全般に関する最新の情報を定期的に提供する薬剤師生涯研修講座を発足させてはどうだろうか。大学が地域社会の発展に積極的に寄与するため県薬剤師会や病院薬剤師会と共同でカリキュラムを作成し、薬剤師の再教育に当たるなどの企画を実現する必要がある。

1997年1月のロシアタンカーの難破による日本海重油汚染が、石川県を含む各県の沿岸に多大の損害を与えたことはまだ記憶に新しい。この重油流出事故に対して金沢大学は素早く対応し、重油成分の分析や沿岸各地の被害の推定に活躍した。本学部でも衛生分析科学講座の教官が中心となって解析に当たり、流出重油中の変異原性成分の分析と、砂中に残存する重油成分の検出を行っている。これは薬学部の地域社会への貢献の例として高い評価を受けている。

薬学部の特徴は、薬物の創出、薬物の生体への影響の評価、それを通じての生体の機能の解析など、すべての教育・研究が物質を基礎にしているところにある。新たに創られた薬物の元素組成の解析、分子構造の決定などは最も得意とする領域である。本学部にも元素分析装置、質量分析装置、単結晶X線構造解析装置、核磁気共鳴装置などの各種の最新の解析装置が備わっており、学内のみならず、多方面からの分析依頼を受け入れている。これらの活動は、薬学部が地場産業の育成に大きく貢献していることを示すもう一つの例である。

これまでの大学人は各自の専門分野に閉じこもり、他を省みることが少ない傾向があった。しかもそのような生き方を良しとする研究者相互の評価もあった。しかし、社会への貢献が強く求められるようになった現在、自己の研究の意義と内容を平易な言葉で一般市民に説明することが是非とも必要である。このことは定義付けされた専門用語を仲立ちとして情報交換を行っている研究者にとっては極めて困難なことではあるが、大学教育開放講座や高校への出張講義、はたまた文部省科学研究費補助金申請などを通じて体得する以外にない。自己の研究成果が社会に認知されることにより、研究の更なる発展が期待できるからである。

(8) 国際交流

大学の国際化が提唱されてから久しい。研究者や留学生の受け入れ、本学の研究者や学生の協定校への派遣など人と人との交流を骨子とする国際交流が金沢大学と諸外国の大学との間で行われている。これらの人的交流により相互の理解を深め、地球規模で活躍する国際人を養成するとともに、学術の発展に寄与することを目的としている。これまでに金沢大学が大学間交流協定を締結した諸外国の大学は23を数え、部局間交流の実績は12に達する。しかしながら、これまでに薬学部が学部間交流協定を締結した外国の大学は皆無であり、今後の積極的協定締結が望まれる。

(9) 薬学部の近未来像

2002(平成14)～2003年には薬学部棟と自然科学研究科棟が完成し、薬学部が角間西キャンパスへ移転する第1陣となる。周辺の環境整備はいまだ十分にはなされていないが、広々としたキャンパスで研究について語り合う教官と、世界各国から集まった学生の姿を目にすることができるであろう。薬学部棟の周辺には様々な種類の桜の木が植えられ、金沢大学の杜の一環をなしている。角間移転にあわせて薬学部は大学院重点化を完成させ、教官はすべて自然科学研究科専任となって最先端の教育・研究を進めている。研究支援の役割を担う各種の実験施設が西キャンパスに設置され、そこでは薬学のみならず理・工学部など全自然科学系の教官・学生が実験にいそしんでいる。

一方、様々な入試制度で選抜された学生が薬学部に入學してくる。年齢も様々で、その教育背景も異なっているが、薬学部で学ぶ意欲にあふれた学生たちである。中には東南アジア地域はもとより世界各国からの留学生が混じっている。日本語が主流であるとはいうものの、英語も頻繁に使われているようだ。1年生から薬学専門教科目の授業が始まるが、薬学の理念やその意義が薬学概論のなかで開陳され、学生に薬学教育・研究の重要性を教える。有機化学、物理化学、生物化学など、これからの薬学の履修に欠くことのできない専門基礎教科目が目白押しに並んでいる。薬学部卒業が薬剤師国家試験受験資格取得の必須要件であるから、薬学部のカリキュラムは密度が高く遊ぶ暇もない。学生は今も昔も忙しい。2年生の半ばまでは主な授業は総合教育棟で行われるが、その後は薬学部へ移り、午前中は授業、午後は実習という、これまた忙しい日々を過ごすことになる。4年生になると卒業論文の作成のため、自然科学研究科棟の薬学系研究室へ配属される。これまでの受け身の学習から、自ら考え計画を立てて実験をするというコペルニクス的転換を体験することになる。また、卒業研究に取り掛かる前に医療薬学演習や1ヵ月の病院実務実習を行わなければならない。しかし1年間はあまりにも短い。9月になると自然科学研究科博士前期課程の生命薬学専攻と医療薬学専攻の入學試験がある。卒業式直後に薬剤師国家試験があるから、おちおち酒を飲んでもおれない。まずは国家試験に合格しなければ一人前の薬学人とはならないのだから。

最後に、薬学部卒業が薬剤師国家試験受験資格取得の必須要件である現状が、未来永劫続くであろうかということを指摘したい。もちろん、いろいろな問題はあっても、これまで優秀な学生が教官のさしたる努力無しに薬学部へ入學してきた。しかしこの状態にいつまでも甘えているわけにはいかない。なぜなら少子化の波がすぐ目前に迫っているのだから。我々金沢大学薬学部は、臨床の場で適切に対応し得る高度の医療薬学知識を持つ薬剤師を養成し、一方で生命科学研究の牙城となるほどの高いレベルの教育・研究を誇る組織に変貌する必要があるのではなかろうか。

第9章 薬学部

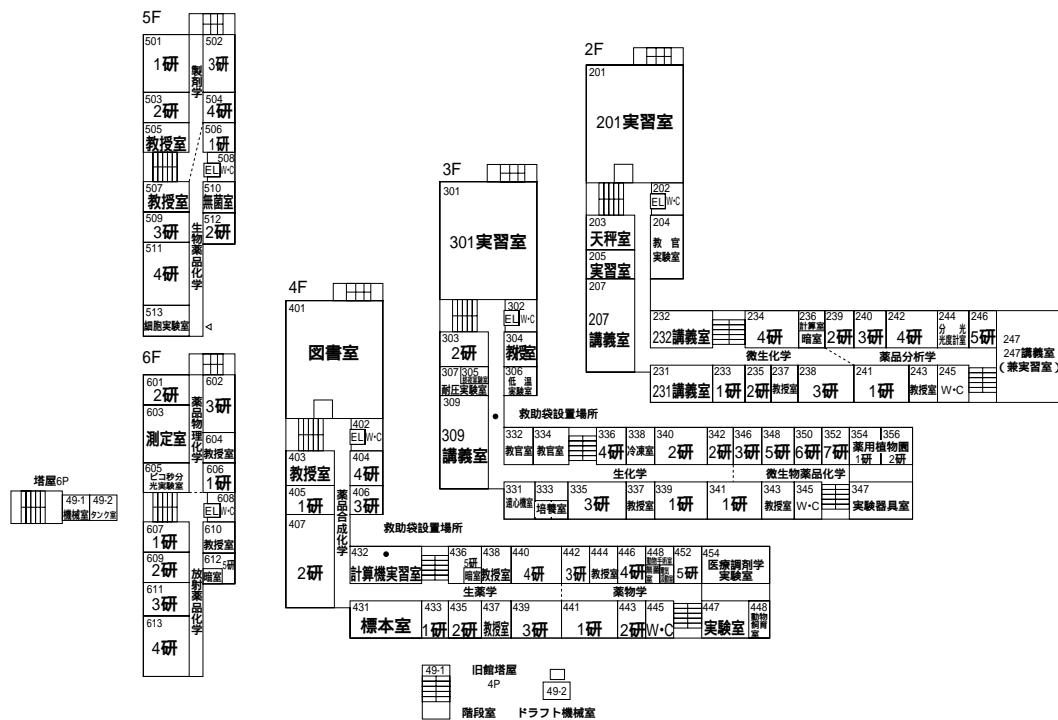


図9 - 6 (2) 平面図 (2階 ~ 6階)

附 録

附録9 - 1 - 1 薬学部発足当時のカリキュラム

薬学部専門課程毎週授業時数配当表

学科名	年次 期別	Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		単位数
		前 (時)	後 (時)	前 (時)	後 (時)	前 (時)	後 (時)	
薬 化 学 (理論・無機・有機)			6	4				10
同 実 習			6	3				3
薬 品 分 析 学 (定量・定径・薬鑑)			3	2				5
同 実 習			6	6				4
生 薬 学 (生薬・生薬化・薬用植物)			2	3	2			7
同 実 習			3	6				3
薬 品 製 造 学 (無機・有機・化学機械)				1	3	4		8
同 実 習					6			2
衛 生 化 学 (衛化・公衆衛 生・裁判化・微生物)			2		2	4		8
同 実 習					6	6		4
生 化 学 (生化・微生物化)				2	4	2		8
同 実 習						9		3
薬 物 学 (薬物・生物検定)					3	3		6
同 実 習						3		1
薬 剤 学 (製剤・調剤・薬局 方概論)						6		6
同 実 習							6	2
生 理 解 剖 学			2	3				5
同 実 習				3				1
薬 制 及 経 営 論 (薬制・経営 論・薬学史)			1				1	2
特 別 実 習							15	5
合 計	講義		16	15	14	19	1	65
	実習		15	18	12	18	21	28
	計		31	33	26	37	22	93

備 考 始業時刻 通年8時30分
4年次の後期には卒業論文を提出させる。
(時)は時間数を示す。

(1) 薬学科課程表

学 科 目	授業科目	開講単位数		学 科 目	授業科目	開講単位数	
		必修	選択			必修	選択
薬 化 学	無 機 機 器 分 析 実 習	1		生物薬品 化学	生物薬品化学Ⅰ	2	
		5			生物薬品化学Ⅱ	2	
		2			実 習	2	
薬 品 分 析 学	定 性 ・ 定 量 機 器 分 析 実 習	3		放射薬品 化学	核 化 学	1	
		2			放 射 化 学	2	
		2			放 射 線 保 健 学 実 習	1	
生 化 学	生 化 学 Ⅰ 生 化 学 Ⅱ 実 習	3			解 剖 学 生 理 学 病 理 学	2	
		2				1	
生 薬 学	生 薬 学 植 物 化 学 実 習 薬 用 植 物 学 同 実 習	2	2		慢 性 毒 性 実 験 微 生 物 概 論 植 物 分 類 学 植 物 生 理 学 薬 学 史 推 計 学 Ⅰ 推 計 学 Ⅱ	1	1
		1				2	
		1				1	
		1				1	
薬 物 学	総 論 各 論 生 物 検 定 実 習	1			天 然 物 合 成 化 学	天然物合成化学Ⅰ	1
		3				天然物合成化学Ⅱ	1
		1				天然物合成化学Ⅲ	1
微 生 物 薬 品 化 学	衛 生 薬 品 化 学 Ⅰ 衛 生 薬 品 化 学 Ⅱ 実 習	2	2		薬 事 法 制 薬 局 経 営 論 臨 床 化 学 栄 養 化 学 香 粧 品 化 学 農 薬 学 生 物 物 理	1	1
		1				1	
		2				1	
		1				1	
衛 生 化 学	衛 生 化 学 衛 生 化 学 ・ 公 衆 衛 生 学 裁 判 化 学 実 習	1			特 別 研 究	実 習	10
		2				10	
製 剤 学	薬 剤 学 薬 局 方 概 論 製 剤 学 実 習	2	2		講 義 合 計 実 習 合 計 合 計	56	24
		1				28	
		1				84	
薬 品 物 理 化 学	薬 品 物 理 化 学 Ⅰ 薬 品 物 理 化 学 Ⅱ 実 習	2				56	24
		3				28	
薬 品 合 成 化 学	薬 品 合 成 化 学 Ⅰ 薬 品 合 成 化 学 Ⅱ		2			84	24
			3				

注 講義合計欄の()内は選択科目の授業時数を示す。

各人は選択科目24単位中12単位以上を選択必修するものとする。したがって卒業に要する所要単位数は

講義 { 必修科目 57単位
 選択科目 12単位以上
 実習 28単位
 計 97単位以上

を修得しなければならない。

4年生の前期間の余分時間および後期の総時間は特別実習を行う。

授業は前期間8時30分から8限、後期間9時~7限を実施する。

(2) 製薬化学科課程表

学 科 目	授業科目	開講単位数		学 科 目	授業科目	開講単位数			
		必修	選択			必修	選択		
薬化学	無 有 実 機 機 習	1		薬品合成 化 学	薬品合成化学Ⅰ 薬品合成化学Ⅱ 実 習	2			
		5				3			
		2				2			
薬品 分析学	定性・定量 機 器 分 析 実 習	3		生物薬品 化 学	生物薬品化学Ⅰ 生物薬品化学Ⅱ		2		
		2				放射薬品 化 学	核 化 学 放 射 化 学 実 習	1	2
		2							1
生化学	生 化 学 Ⅰ 生 化 学 Ⅱ 実 習	3	2		解 剖 学 生 理 学 病 理 学 慢 性 毒 性 実 験 微 生 物 概 論 植 物 分 類 学 生 物 物 理 史 薬 学 史 推 計 学 Ⅰ 推 計 学 Ⅱ	2			
生薬学	生 薬 学 植 物 化 学 実 習 薬 用 植 物 学	1.5			2				
		2	2		2		1		
		1	1		1		1		
薬物学	総 論 各 論 実 習	1			2				
		2			1		2		
		1			1		1		
微生物 薬品化学	衛生物薬品化学Ⅰ 衛生物薬品化学Ⅱ 実 習	2		天 然 物 合 成 化 学	天然物合成化学Ⅰ 天然物合成化学Ⅱ 天然物合成化学Ⅲ	1			
		2				1			
		1.5			高 分 子 化 学 化 学 機 械 学 薬 事 法 制 製 薬 工 業 経 済 学 工 場 衛 生 学 農 薬 学	2			
薬品製造 化 学	無 有 実 機 機 習	2			2		1		
		3			2		1		
		2.5			1		1		
衛生化学	衛 生 化 学 衛生化学・公衆衛生学 裁 判 化 学		1		2		1		
			2		1		1		
			1		1		1		
製 剤 学	薬剤学薬局方概論 製 剤 学 実 習		2		工 場 衛 生 学 農 薬 学		1		
		2			1		1		
		1		特別研究 実 習	10				
薬品物理 化 学	薬品物理化学Ⅰ 薬品物理化学Ⅱ 実 習	2		講 義 実 習 合 計	合 計	54	27		
		3				27			
		1.5				81	27		

注 講義合計欄の()内は選択科目の授業時数を示す。

各人は選択科目27単位中14単位以上を選択必修するものとする。したがって卒業に要する
所要単位数は

講義 { 必修科目 55単位
 { 選択科目 14単位以上
実習 27単位
計 96単位以上

を修得しなければならない。

備考 昭和45年度以降の入学生に対する両学科のカリキュラムは追って改正される予定である。

(1) 薬学科

	科目	開講単位数				科目	開講単位数		
		必修	選択				必修	選択	
			A	B				A	B
2 年 前 期	薬学概論	1			3 年 後 期	高分子化学		2	
	物理化学Ⅰ	3				化学機械学		2	
	無機化学	1				薬理学Ⅱ	*2		
	有機化学Ⅰ	3				分子生物学Ⅰ	*2		
2 年 後 期	放射化学	1			4 年 前 期	分子生物学Ⅱ		2	
	分析化学Ⅰ	3				放射線生物学	*2		
	物理化学Ⅱ		2			病態生化学		1	
	衛生化学		*2			毒性学		1	
	公衆衛生学		*1			薬剤学Ⅱ	*1		
	有機化学Ⅱ	4				薬事法制		1	
	無機製造化学		1		4 年 後 期	裁判化学		1	
	生化学Ⅰ	2				界面化学		1	
	微生物学		*1			放射線保健学		1	
	薬用植物学		*2			臨床化学		1	
	基礎医学Ⅰ	1				薬業経済学		1	
	基礎医学Ⅱ	1				農薬学		1	
基礎医学Ⅲ	1			情報処理・文献調査		1			
推計学	1			公書		1			
3 年 前 期	分析化学Ⅱ		2	2	特別講義Ⅰ		1		
	分子構造論				特別講義Ⅱ		1		
	有機製造化学		3		特別講義Ⅲ		1		
	合成化学		3		4 年 後 期	分析・衛生化学系実習	2.5		
	生化学Ⅱ	1				有機化学系実習	4.5		
	生化学Ⅲ	3				生物化学薬理実習	1		
	薬理学Ⅰ	3				生物化学系薬植生薬実習	1		
	応用微生物化学		*3			物理化学系実習	2.2		
	生薬学		*2			生物化学系実習	3.5		
	局方概論		*1			調剤実習	0.5		
薬剤学Ⅰ		*1	卒業研究	20					
3 年 後 期	製剤学		2						
	生物物理化学			1					
	天然物化学Ⅰ		2						
	天然物化学Ⅱ		2						

注 卒業に必要な最少修得単位数は次のとおりである。

講義 必修科目 29単位

選択科目 A:28単位。そのうち15単位以上は、*印をつけた重点選択科目のうちから選ばなければならない。

B:10単位

実習 (必修) 15.2単位

卒業研究 (必修) 20単位

講義および一般実習は4年前期の半ばまでに終わり、以後の時間は卒業研究のためにあてられる。

講義は15時間、実習および卒業研究は45時間をもって、それぞれ1単位とする。

(2) 製薬化学科

	科目	開講単位数				科目	開講単位数		
		必修	選択				必修	選択	
			A	B				A	B
2 年前期	薬学概論	1			3 年後期	高分子化学		2	
	物理化学Ⅰ	3				化学機械学		2	
	無機化学	1				薬理学Ⅱ	2		
	有機化学Ⅰ	3				分子生物学Ⅰ	2		
2 年後期	放射化学	1			4 年前期	分子生物学Ⅱ		2	
	分析化学Ⅰ	3	*2			放射線生物学	2		
	物理化学Ⅱ		2			病態生化学		1	
	衛生化学		1			毒性学		1	
	公衆衛生学		1			薬剤学Ⅱ	1		
	有機化学Ⅱ	4				薬事法制		1	
	無機製造化学		*1			裁判化学		1	
	生化学Ⅰ	2				界面化学		1	
	微生物学		1			放射線保健学		1	
	薬用植物学		2			臨床化学		1	
3 年前期	基礎医学Ⅰ	1			薬業経済学		1		
	基礎医学Ⅱ	1			農業学		1		
	基礎医学Ⅲ	1			情報処理・文献調査		1		
	推計学	1			公害		1		
	分析化学Ⅱ		*2	2	特別講義Ⅰ		1		
	分子構造論				特別講義Ⅱ		1		
	有機製造化学		*3		特別講義Ⅲ		1		
	合成化学		*3		4 年後期	分析・衛生化学系実習	2.5		
	生化学Ⅱ	1				有機化学系実習	4.5		
	生化学Ⅲ	3				生物化学薬理実習	1		
薬理学Ⅰ	3			生物化学系薬植生薬実習		1			
応用微生物化学		3		物理化学系実習		2.2			
生薬学		2		生物化学系実習		3.5			
局方概論		1		調剤実習		0.5			
薬剤学Ⅰ		1		卒業研究	20				
3 年後期	製剤学		*2	1					
	生物物理化学								
	天然物化学Ⅰ		*2						
	天然物化学Ⅱ		*2						

注 卒業に必要な最少修得単位数は次のとおりである。

講義 必修科目 29単位

選択科目 A:28単位。そのうち13単位以上は、*印をつけた重点選択科目のうちから選ばなければならない。

B:10単位

実習 (必修) 15.2単位

卒業研究 (必修) 20単位

講義および一般実習は4年前期の半ばまでに終わり、以後の時間は卒業研究のためにあてられる。

講義は15時間、実習および卒業研究は45時間をもって、それぞれ1単位とする。

第9章 薬学部

附録9 - 1 - 4 1985 (昭和60)年改正のカリキュラム(3コース制)

	授業科目	開講単位数			授業科目	開講単位数			
		必修科目	選択科目			必修科目	選択科目		
			生物系	化学系			医療衛生系	生物系	化学系
2年前期	有機化学Ⅰ	3			3 年 後 期	放射線生物学	2		
	物理化学Ⅰ	2				細胞生物学	2		
	有機化学概論	1				微生物学	2		2
	機能形態学	1				薬物治療学	2		2
2年後期	有機化学Ⅱ	4				衛生化学Ⅱ	1		1
	物理化学Ⅱ	2				薬剤学Ⅱ	1		1
	分析化学Ⅰ	2				内分泌学	1		
	生薬学Ⅰ	2				免疫学	1		
	生薬学Ⅱ	2				薬品化学Ⅱ	1	2	
	生薬学Ⅲ	2				天然物化学	2	2	
	解剖学Ⅰ	2				機器分析学	2	2	
	薬理学Ⅰ	2				有機量子化学	2	2	
3年前期	放射化学	1				錯体化学	2		
	用植物学	1				立体化	1		
	分析化学Ⅱ	2				工業化学概論	1		
	薬理学Ⅱ	2				化学概論	1		
	衛生化学Ⅰ	2			電子機器概論	1			
3年前期	薬剤学Ⅰ	2			製剤学			2	
	薬剤学Ⅱ	1			調剤学			1	
	薬剤学Ⅲ	1			臨床化学			1	
	分子生物学	2	2	2	医薬情報学			1	
	生化学Ⅲ	2	2	2	文献調査法*	1	1	1	
	生理学	2	2	2	情報科学*	1	1	1	
	推計学	2	2	2	薬業経済*	1	1	1	
	医薬品化学総論	2			4 年 後 期	分析化学実習	1		
	医薬品化学Ⅰ		2			有機化学実習	4		
	物理化学Ⅲ		2			物理化学実習	1		
合成化学		2		薬理学実習		1			
反応有機化学		2		生薬・薬用植物学実習	1				
生体成分化学		2		衛生化学実習	1				
公衆衛生学			1	生物化学実習	3				
環境衛生学			1	製剤学・調剤学実習	1				
				演習又は病院薬学実習	2				
				卒業研究	8				

注 選択科目は、次の各学科の指定する選択科目系を履修しなければならない。なお、各選択科目系の定員は別に定める。

薬学科 生物系又は医療衛生系

製薬化学科 化学系又は医療衛生系

本表の授業科目から修得すべき最少修得単位数は、次のとおりである。

講義 必修科目 38単位

選択科目 24単位 (うち4単位は3年後期開講の他の選択科目系の選択科目からも履修することができる。)

実習 13単位

演習又は病院薬学実習 2単位 (なお、医療衛生系を選択したものは病院薬学実習を履修しなければならない。)

卒業研究 8単位

*印を付した授業科目から修得した単位は、第15条に規定する卒業に必要な単位には算入しない。

附録9 - 1 - 5 医療薬学教育を加えた新カリキュラム

科目番号	授 業 科 目	開 講 学 期			区 分		単位数
		学年	前期	後期	薬学科	製薬化学科	
001	有機化学Ⅰ	1			必修	必修	2
002	生化学Ⅰ	1			必修	必修	2
003	解剖学Ⅰ	1			必修	必修	2
004	無機化学Ⅰ	1			必修	必修	1
005	薬学概論Ⅰ	1			必修	必修	1
011	有機化学Ⅱ	1			必修	必修	2
012	生化学Ⅱ	1			必修	必修	2
013	分析化学Ⅰ	1			必修	必修	2
014	薬用資源学Ⅰ	1			必修	必修	1
015	薬機能形態学Ⅰ	1			必修	必修	1
021	薬理学Ⅰ	2			必修	必修	2
022	物理化学Ⅰ	2			必修	必修	2
023	分析化学Ⅱ	2			必修	必修	2
024	有機化学Ⅲ	2			必修	必修	2
025	衛生薬学Ⅰ	2			必修	必修	2
026	生薬学Ⅰ	2			必修	必修	2
031	生薬学Ⅱ	2			必修	必修	2
032	薬剤学Ⅰ	2			必修	必修	2
033	薬理学Ⅱ	2			必修	必修	2
035	物理化学Ⅱ	2			必修	必修	2
036	薬品化学Ⅰ	3			必修	必修	2
037	有機化学Ⅳ	2			必修	必修	2
042	微生物・ウイルス学	2			必修	必修	2
034	衛生薬学Ⅱ	2			必修	必修	1
039	放射化学	2			必修	必修	1
040	薬局方学	3			必修	必修	1
054	薬生局理	2			必修	必修	2
073	病態生理学	3			必修	必修	2
046	薬薬事学	3			必修	必修	2
047	薬剤学Ⅱ	3			必修	必修	1
048	臨床薬物代謝化学	3			学科選択	学科選択	2
066	病院薬学	3			学科選択	学科選択	2
051	細胞生物学	3			学科選択	学科自由選択	2
055	生化学Ⅲ	3			学科選択	学科自由選択	2
056	推計学	3			学科選択	学科自由選択	2
065	製剤学	3			学科選択	学科自由選択	2
043	免疫薬学	3			学科選択	学科自由選択	1
049	医用遺伝子工学	3			学科選択	学科自由選択	1
057	衛生薬学Ⅲ	3			学科選択	学科自由選択	1
067	医薬品情報解析学	3			学科選択	学科自由選択	1
091	文献調査法	3			学科選択	学科選択	1
092	情報科学	2			学科選択	学科選択	1
093	薬業経済学	3			学科選択	学科選択	1
071	放射線生物学	3			学科選択	学科自由選択	2
074	新薬論	3			学科選択	学科自由選択	2
075	薬物療学	3			学科選択	学科自由選択	2
076	薬毒学	3			学科選択	学科自由選択	2
072	内分泌学	3			学科選択	学科自由選択	1
085	臨床化学	3			学科選択	学科自由選択	1
084	衛生薬学Ⅳ	3			学科選択	学科自由選択	1
044	機能生理解学	2			学科選択	学科自由選択	1
086	東洋医学	3			学科選択	学科自由選択	1
094	薬学英	3			学科選択	学科選択	1

第9章 薬学部

科目番号	授業科目	開講学期			区分		単位数
		学年	前期	後期	薬学科	製薬化学科	
095	情報科学演習	3			学科選択	学科選択	1
058	合成化学	3			学科自由選択	学科選択	2
059	天然物化学	3			学科自由選択	学科選択	2
060	物理化学Ⅲ	3			学科自由選択	学科選択	2
062	機器分析学	3			学科自由選択	学科選択	2
063	応有機化学	3			学科自由選択	学科選択	2
077	医薬品化学Ⅱ	3			学科自由選択	学科選択	2
078	生体成分化学	3			学科自由選択	学科選択	2
079	有機量子化学	3			学科自由選択	学科選択	2
080	有機金属化学	3			学科自由選択	学科選択	1
068	生物無機化学	3			学科自由選択	学科選択	2
069	薬物分子設計学	3			学科自由選択	学科選択	1
081	電子機器概論	3			学科自由選択	学科選択	1
083	化学工学概論	3			学科自由選択	学科選択	1
041	有機化学演習	2			学科自由選択	学科選択	1
173	医療薬学演習	4			必修	必修	2
101	分析化学実習	2			必修	必修	1
102	有機化学実習	2			必修	必修	4
103	物理化学実習	3			必修	必修	1
104	薬理学実習	3			必修	必修	1
105	生薬・薬用植物学実習	3			必修	必修	1
106	衛生化学実習	3			必修	必修	1
107	生物化学実習	3			必修	必修	3
108	製剤学・調剤学実習	3			必修	必修	1
172	病院実務実習	4			必修	必修	3
別記	卒業研究	4			必修	必修	5

区分	薬化	分析	生化	生薬	薬物	微生物	衛生	薬造	製剤
卒業研究	181	182	183	184	185	186	187	188	189

区分	物化	合成	生物	放射	薬植	薬剤	医療薬剤学	結晶物理学	運動生化学
卒業研究	190	191	192	193	194	195	196	197	198

注 4年次必修科目履修に必要な修得単位数

所定の教養的科目から36単位以上と、専門科目は3年後期までの必修及び指定された同一科目分野に含まれる選択第1から74単位以上（うち科目番号001から086の中から64単位以上、101から108の中から10単位以上、ただし、この54単位中4単位までは選択第2で代替可）で、かつ教養的科目及び専門科目合わせて118単位以上を修得しなければならない。

卒業に必要な修得単位数

教養的科目から所定の44単位以上と、卒業に必要な単位は、合計95単位以上とし、単位数は次のとおりとする。

必修単位（75単位）

専門科目 52単位
 医療薬学演習 2単位
 学科実習 13単位
 病院実務実習 3単位
 卒業研究 5単位

選択科目（20単位以上）

学科選択科目 20単位

（うち5単位は学科自由選択科目からも履修することができる。）

附録 9 - 2 学会賞等受賞者

薬学部関係者で学会関係の賞を受賞された人々は次のとおりである。

日本薬学会関係の賞

日本薬学会学術賞

水野義久（1954年） 鶴飼貞二・荒田義雄（1958年）
三浦孝次（1966年） 山名月中（1976年）
藤井澄三（1982年）

日本薬学会奨励賞

亀田幸雄（1955年） 小菅卓夫（1955年）
金友昭一（1965年） 大場義樹（1969年）
西川嘉廣（1972年） 大熊勝治（1988年）
寺崎哲也（1992年） 早川和一（1994年）
玉井郁巳（1997年）

日本薬学会学術貢献賞

津田喜典（1997年）

日本薬学会教育賞

平本 実（1972年） 黒野吾市（1974年）
山本 譲（1988年）

日本薬学会功労賞

金子主税（アボット賞、1976年）

日本薬学会宮田専治学術賞

山本 譲（1971年） 金子主税（1975年）
津田喜典（1978年） 伊藤道也（1984年）
板谷泰助（1987年）

日本薬学会以外の賞

日本分析化学会賞	宮崎元一（1993年）
病院薬学会賞	市村藤雄（1993年）
アメリカ薬学会最優秀論文賞	辻 彰・寺崎哲也・玉井郁巳（1996年）
日本水環境学功労賞	宮崎元一（1992年）
日本大気保全功労賞	宮崎元一（1992年）
常陸宮総裁賞	木村久吉（1974年）
内藤記念科学奨励賞	友枝宗光（1971年）
日本薬物動態学会奨励賞	寺崎哲也（1991年） 横井 毅（1996年）
日本生薬学会学術奨励賞	木内文之（1994年）

第9章 薬学部

日本毒科学会（田邊賞） 横井 毅（1995年）
環境賞（1996年度） 早川和一（1996年）

ほかに旧教官として、桜井欽夫（1970年）、吉岡一郎（1976年）、小菅卓夫（1987年）、金子主税（1993年）がそれぞれ日本薬学会学術賞を、田辺晋（1974年）が日本薬学会功労賞をそれぞれ受賞しており、卒業生では上農義雄（1956年）が日本薬学会学術賞を、阿知波一雄（1995年）が日本薬学会賞を、中沢政之（1994年）が日本薬学会技術賞を受賞している。

附録 9 - 3 外国人留学生

1997年現在で薬学部に留学した学生の延べ数は44名であり、内訳を下記に示す。

国費留学生

専攻生、研究生：3名
修士課程学生：6名 うち3名は博士課程に進学。
博士課程学生：8名（上記3名を含む）

政府派遣学生

学部学生：2名 うち1名は本学修士課程に進学。
修士課程学生：2名（上記1名を含む） うち1名は医学研究科博士課程（がん研）に進学。
博士課程学生（薬学部教官指導）：1名

私費留学生

専攻生、研究生：9名
修士課程学生：7名
博士課程学生（薬学部教官指導）：4名

その他

金沢市費留学生：1名
石川県海外移住者子弟留学生：1名

附録 9 - 4 退官教授の履歴

鶴飼貞二教授（初代学部長）

1896（明治29）年、名古屋市に生まれる。1921（大正10）年、東大・薬を卒業後、衛生試験所技師、熊本薬専教授を経て1939（昭和14）年に金沢医科大学附属薬専教授（主事）として着任した。肋膜炎を患ったこともあり体力的には強靱とはいえなかったが、精神的にはいつまでも青年の若さを保持して情熱的であり、純情で正義感に富む性格の持ち主であった。1958年、荒田教授とともに「川骨成分の研究」で日本薬学会賞を受賞した。無名の県立静岡薬大を在職15年間で一流校に発展させた後、北陸大・薬の創立に参加して名誉学長にもなっ

ている。1980年11月に逝去した。享年84才。

三浦孝次教授（第2代学部長）

1903年10月、金沢市（旧）小橋町の薬種商に生まれる。横浜へ養子に行き一高を受験したが体格検査で不合格となり、生家に帰省療養中に関東大震災で養家は全滅した。1926年、金沢医科大附属薬専を卒業後、東京衛生試験所に入ったが再度健康を害し、帰郷して金沢医科大学薬物学教室に勤務して助教授になる。1950年より薬学部教授として薬物学講座を担当し、1957年の学部火災の際には学部長として苦勞をされた。1966年、「ニトロフラン誘導体の実験化学療法的研究」で日本薬学会学術賞を受賞している。退官後、和漢薬研究所を設立したが、1975年、北陸大の創設に参加してその学長となる。高峰讓吉博士顕彰会理事長を長年務めたほか『加賀藩の秘薬』を著し、『薬学部百年史』を残している。1980年5月に逝去した。享年76才。

平本実教授（第3代学部長）

1907年、東京都に生まれる。1932年、東大・薬を卒業後、帝国女子薬専教授、厚生省技師を経て、1944年に金沢医科大学附属薬専教授として着任した。学部長として焼失校舎の再建に苦勞され、1963年の豪雪時における第17回薬学大会では大会副委員長として活躍された。1973年に停年退官して名誉教授となり、同年日本薬学会教育賞を受賞した。城西大・薬学部教授を経た後、1995（平成7）年11月に逝去した。享年88才。

荒田義雄教授（第4代、第6代学部長）

1911年、金沢市に生まれる。1934年、金沢医科大学附属薬専を卒業し助手、助教授を経て1952年、教授に昇任して薬品製造学講座を新設した。1958年、「川骨成分の研究」で、鶴飼教授とともに日本薬学会学術賞を受賞している。学部長としては学生との懇談会を開設したり、刑務所跡地の獲得に努力されたほか、電子顕微鏡、NMR、質量分析装置等々の研究機器の充実や学生実習器具の集中管理に成果を挙げた。1977年、停年退官し名誉教授となる。北陸大学の学長を勤めた後、1994年6月に逝去した。享年83才。

黒野吾市教授（第5代学部長）

1909年、大分県竹田市に生まれる。1936年に東大・薬を卒業後、衛生試験所を経て1950年に着任し生薬学講座を担当する。1975年、停年退官し名誉教授となる。明治薬大教授在籍中の同年12月に逝去した。享年65才。学部長在任中は製薬化学科の増設や寄附金による薬学講堂の建設、薬草園の制度化などに多くの功績を挙げた。

高橋幸太郎教授（第7代学部長）

1916年、富山市に生まれる。1939年、東大・薬を卒業後、海軍に勤務し少佐まで昇進した。終戦で再び東大・薬に勤めた後、1955年に水野教授（分析学）の後任として本学に着任した。学部長在任中は大学院博士課程実現や刑務所跡地の確保などの問題で苦勞された。1981年に停年退官し、名誉教授となる。

山本讓教授（第8代学部長）

1923年、姫路市に生まれる。金沢医科大学附属薬専卒業後、京大大学院（薬）修了。

第9章 薬学部

1951（昭和26）年、金沢大学薬学部に薬化学の助教授として赴任し、1956年に生化学の教授に昇任した。以後母校のため豪雪時学会の会場設営、同窓会の改組、製薬化学科棟建設、薬友会支部の再建、学生との懇談会などの裏方の部分を担当した後、学部長及び学生部長としても多大の功績を残した。1972年、「かびの代謝物の化学及び生合成の研究」で宮田学術賞を受賞した。1985年、日本薬学会105年会組織委員長を務め、1988年に停年退官して名誉教授となる。同年、日本薬学会教育賞及び金沢市文化賞を受賞した。

藤井澄三教授（第9代学部長）

1930年、富山市に生まれる。1953年に東大・薬卒業後、同大学大学院修了。東大・薬・助教授を経て、1967年着任し薬品合成化学講座を創設した。学部長時代は学部内の規則や図書室の整備に力を注いだ。1982年には「融合キノリチジン環系アルカロイドの合成と立体化学に関する研究」で日本薬学会学術賞を受賞した。1995年に停年退官し名誉教授となる。

大場義樹教授（第10代、第14代学部長）

1932年釧路市に生まれる。1957年、東大・薬を卒業し、同大学大学院を修了後、日本薬学会奨励賞を受賞した。1968年、東大・薬・助教授を経て本学に赴任して生物薬品化学講座を創設した。学部長として学部の機構改革に腕を振るい、1996年より学生部長を務めたほか、平成9年度の第70回日本生化学会会頭として立派に責任を果たした。1998年3月に停年退官して名誉教授となる。

宮崎元一教授（第13代学部長）

1930年、東京都に生まれる。1955年に東大・薬を卒業後、千葉大・薬を経て1973年に平本教授の後任として衛生化学講座の教授に就任した。1992年に日本大気保全功労賞及び日本環境功労賞を、1993年に日本分析化学会賞を受賞するなど環境衛生の分野で功績を挙げた。1996年に停年退官し、名誉教授となる。

水野義久教授

（「2-(2) 学部長選挙と抗生物質学講座の新設など」の項参照）

田辺晋教授

（「3-(1) 火災発生と5ヵ年計画による再建」の項参照）

池田鉄太郎教授

1932年、東大・薬卒業。1954年9月に塩野義製薬から赴任し、立派な薬学教育を受けるのが教授の使命であるとの信念で学生の教育・指導に力を注がれるとともに、几帳面で理性的な個性を円満な常識でくるんで物事に対処されていた。1990年8月に逝去した。享年80才。

亀田幸雄教授

1910（明治43）年、石川県に生まれ、1931年金沢医科大学附属薬専を卒業し助教授にまで昇任したが、上京して三共に勤務後、新制大学発足と同時に薬学部教授として着任した。1955年に日本薬学会奨励賞を受賞している。誰からも憎まれないユニークな性格の持ち主で、1976（昭和51）年に停年退官して名誉教授となった。北陸大に勤務後、1987年2月に逝去

した。享年77才。

山名月中教授

1919（大正8）年、箕面市に生まれ、1941年に東大・薬を卒業後、大阪市大附属病院薬局長を経て、1960年に薬局長兼薬剤学教授として本学に着任した。1976年「医薬品製剤安定性の速度論的研究」で日本薬学会学術賞を受賞し、製剤学の領域に新しい分野を開拓した。また、この賞金を基金として同年、山名奨学制度が創立された。1984年に停年退官し名誉教授となる。

友枝宗光教授

1924年、東京都に生まれ、1946年に東大・薬を卒業後、九大・薬を経て、1962年に本学に赴任した。新しいセンスでカリキュラムや大学院問題に取り組むなど学部の中心として期待されていたが、学園の研究にあきたらず、企業での展開を期してエーザイに転進した。1987年1月に出張中の岐阜で急逝した。享年62才。

細谷東一郎教授

1925年、岩手県に生まれ、1950年に東大・理を卒業後、群馬大・内分泌研を経て、1967年に本学に着任して薬品物理化学講座を創設し、1976年に千葉大・薬に転出した。

堀川正克教授

（「5-(1) 第2世代の時代へ」参照）

金子主税教授

（「5-(1) 第2世代の時代へ」参照）

山内脩教授

（「6-(4) 入学試験制度の変遷など」参照）

伊藤道也教授

1932年、新潟県に生まれる。1976年に東大・薬を卒業後、分子研、東大・薬を経て、1976年に細谷教授（薬品物理化学）の後任として赴任した。1984年に宮田専治学術賞を受賞している。1997年停年退官して名誉教授となる。

津田喜典教授

1932年、富山県に生まれる。1953年に金沢大・薬を卒業後、阪大・薬を経て昭和薬大教授を勤めていたが、1976年に黒野教授（生薬学）の後任として母校に赴任した。1979年に宮田専治学術賞を、1997年に日本薬学会学術貢献賞を受賞している。1997年停年退官して名誉教授となる。

金沢大学薬学部年譜

西暦	年号	月	日	事	項
1867	慶応 3	7		加賀藩は卯辰山養生所（頭取：黒川良安）を開き、製薬所と薬園を附設した。製薬所は薬園の植物よりシロップやエキスを調製するとともに含密局等（総理：高峰元桂）を置き硫酸、塩酸、雷汞等を製造した。金沢大学薬学部はこの時を創立の年としている。	
70	明治 3	2		卯辰山養生所製薬所を加賀藩医学館製薬所（5年制）と改称し、大手町（現県医師会館）に移った。	
71	明治 4	3		オランダ医師ペア・スロイスが教授として着任し、薬剤師の必要性を説き薬学専修希望者に講義を行った。	
		4		ペア・スロイスはさらに理化学系を分離して医学館附属理化学校とし、兼六園内の時雨亭跡に校舎を移し、生徒を募集した。	
72	明治 5	4		廃藩置県令の発布に伴って金沢藩のすべての学校が廃止された。加賀藩医学館は、石川県から一切の設備を借用して一年間私立の金沢病院を運営し、さらに翌年3月から県の補助金を得て診療と教育に当たり、薬学はその製薬所として病院薬局を担当した。	
74	明治 7			はじめて、4、5人の薬学専修志望者が入学した。	
75	明治 8	8		私立の医学館製薬所は、石川県立金沢医学館製薬所となった。	
76	明治 9	8		診療（金沢病院）と教育（医学所）が分離され、薬学教育は金沢医学所薬局学科として再発足した。	
79	明治12	5		堤従清などはじめての卒業生（3名）が出た。	
		11		金沢医学所薬局学科は、金沢医学校製薬学科と改称した。	
83	明治16			金沢在住の薬舗主により鞭草会が発足した。鞭草会は、知識の交換や親睦にとどまらず、講習会を開き薬舗検定試験に多数の合格者を出した（鞭草会は、明治19年に石川薬舗会に発展拡大し、明治23年に石川県薬剤師会と改称した）。	
84	明治17	1		金沢医学校製薬学科は、明治15年公布の薬学校通則で金沢甲種医学校附設乙種薬学校になった。	
87	明治20	8		第四高等中学校医学部の設置に伴い、甲種医学校及び附設乙種薬学校はいずれも廃止された。	
88	明治21	1		石川薬舗会は修学中の生徒を救うため西町の石川薬館内に私立北陸薬学講習所を開いた（所長：宮竹屋11代亀田伊右衛門）。	
89	明治22	4		官立第四高等中学校医学部薬学科の開設が許可された。	
		9		官立第四高等中学校医学部薬学科が、分析学、生薬学、製薬化学の3教室で開講され（科長：桜井小平太）、北陸薬学講習所は目的を達成して閉鎖された。	
92	明治25			第四高等中学校医学部の大手町から広坂通への移転に伴い、薬学科も新築移転した（187坪：現在の中央公園）。	
94	明治27	4		第四高等中学校医学部薬学科は、第四高等学校医学部薬学科と改称した。	
1901	明治34	4		専門学校令により、第四高等学校医学部薬学科は金沢医学専門学校薬学科となった。	
12 (14 ~ 18)	大正元	9		金沢薬学会が発会し、金沢薬学会誌第1号が発刊された。 第一次世界大戦	

23	大正12	4		金沢医学専門学校が金沢医科大学に昇格し、金沢医学専門学校薬学科は、その附属薬学専門部となった。
24	大正13			理論化学と植物学を理学系で補強して5教室となった。
25	大正14			浅野三千三教授が赴任して6教室となった。
29	昭和 4			小立野の現在地に移った（木造2階建430坪）。 室生犀星作詞、弘田龍太郎作曲の学生歌「名無草」が生まれた。
31	昭和 6			浅野三千三教授が薬学専門部主事となった。
36	昭和11			浅野三千三教授が「地衣脂肪酸並びにプルヴィン酸系色素に関する研究」で学士院賞を受賞した。
38	昭和13	12	1	浅野三千三教授が東京帝国大学医学部薬学科へ転任した。
39	昭和14	4	13	鶴飼貞二主事が熊本薬学専門学校から赴任した。
(41	~ 45)			第二次世界大戦
41	昭和16	12		繰り上げ卒業が始まった。昭和16年度は3ヵ月、以後20年度までは半年。
47	昭和22	5	15	金沢で日本薬学会学術大会（会期：5月15～16日）が開催された。参加者2,000名。また金薬同窓会（参加者350名）を同時に開催し、母校の大学昇格期成運動が盛り上がった。
49	昭和24	5	31	金沢大学薬学部が発足し、初代学部長に鶴飼貞二教授が就任した。
50	昭和25	7		教授会で教授予定者を決定した。
51	昭和26	7		金沢大学薬学部研究年報が発刊された（昭和39年度廃刊）。
52	昭和27	12		8講座（薬化学、製薬学、衛生化学、薬物学、薬品分析学、薬剤学、生化学、生薬学）からなる薬学部教官陣が完成した。
53	昭和28	1		金沢大学薬学部同窓会（会長：三浦孝次）が設立された。
		3		金沢大学薬学部第1回卒業生が巣立った。
		9		金沢大学薬学部同窓会誌創刊号が発刊された（9号まで続く）。
54	昭和29	4		薬学専攻科が設置された（昭和39年3月に廃止）。
		12		鶴飼貞二学部長が県立静岡薬科大学長に就任のため退官した。
		5	16	三浦孝次教授が第2代学部長に選任された。
		9	1	池田鉄太郎教授（薬化学）が塩野義製薬株式会社から赴任した。
55	昭和30	6	16	水野義久教授（薬品分析学）が北海道大学医学部薬学科へ転任した。
		7	20	田辺晋助教授が教授（薬剤学）に昇任した。
		9	16	高橋幸太郎教授（薬品分析学）が東京大学医学部から赴任した。
		10		日本薬学会北陸支部が創立された。
56	昭和31	5		中央分析室の管理と運営のため中央分析委員会内規が制定された。
		6		抗生物質学講座が新設され、亀田幸雄教授（生化学）が担当することになり、10月に開講した。
		7		薬学部自治会の機関誌「どくにんじん」が創刊された [28号（昭和56年3月発行）まで続いた]
		11		金沢大学薬学部同窓会から同窓記念図書館の寄付を受けた。 生薬学講座が城内から小立野（旧看護婦宿舍）へ移転した。
		12	1	山本讓助教授が教授（生化学）に昇任した。
57	昭和32	5	5	早朝薬学部本館から出火、430坪を烏有に帰す。
		8		校舎復興期成同盟会（会長：益谷秀次）が発足した。
		10		復興5ヵ年計画案が策定された。

第9章 薬学部

58	昭和33	4	1	平本実教授が第3代学部長に就任した。
		9	1	第一期工事起工式が挙行された。
59	昭和34	5	27	第一期工事竣工式が挙行された。鉄筋コンクリート4階建（447坪）。
		8		田辺晋教授（薬剤学）が退官した。
60	昭和35	1	1	医学部附属病院山名月中薬局長が薬剤学教授に併任された。
		3		第2期工事（442坪）が竣工した。竣工式は10月に挙行された。
		9	27	昭和35年度国立及び全国薬科大学長会議を当番校として山中温泉聴泉閣で開催した（会期：9月27～28日）。
61	昭和36	11	1	山名月中薬局長が薬剤学教授に配置換えとなり、医学部附属病院薬局長に併任された。
62	昭和37	1	31	池田鉄太郎教授（薬化学）が武庫川女子大学薬学部の新設に伴い薬学部長に就任のため退官した。
		4	1	荒田義雄教授が第4代学部長に就任した。
		5	1	池田鉄太郎教授（薬化学）の後任に友枝宗光教授が九州大学医学部から赴任した。
63	昭和38	4	7	豪雪の年。第17回日本薬学会年会（第一部：大会委員長荒田義雄会期：4月7～8日）が金沢で開かれた（参加者4,000名）。
		11		第3期工事（164坪）が竣工し、校舎建築5ヵ年計画が達成された。
64	昭和39	2		二学科制対策専門委員会が発足した。
		3		薬学専攻科が廃止された。
		4	1	黒野吾市教授が第5代学部長に就任した。
				金沢大学薬学部同窓会を、学部長を会長とし、同窓生、学生、教職員 の三位一体の「金沢大学薬友会」に改組した。
		5		大学院薬学研究科薬学専攻（修士課程）が設置され3名の学生が入学した。
		12		金沢大学薬友会誌創刊号が発行された。
65	昭和40	2		医薬放射性同位元素実験室が完成した（十全講堂と病院の間）。
66	昭和41	4		製薬化学科を新設し二学科制となった（学生40名増募）。
				薬剤学を製剤学に、薬品製造学を薬品製造化学に改称し、製薬化学科へ振り替えた。
				製薬化学科の設置に伴いカリキュラムを改正し、学科ごとのカリキュラムを編成した。
67	昭和42	3		製薬化学科棟が着工された。
		4		製薬化学科に薬品物理化学、薬品合成化学の2講座が設置された。
		7	1	細谷東一郎教授（薬品物理化学）が群馬大学内分泌研究所から赴任した。
		8	1	藤井澄三教授（薬品合成化学）が東京大学薬学部から赴任した。
				抗生物質学を微生物薬品化学に改称した。
		10	28	薬学部創立百周年記念式典を十全講堂で挙行し、金沢大学薬友会から薬学講堂（60坪）の寄付を受けた。
				金沢大学薬学部百年史が刊行された（編集委員長：三浦孝次）。
68	昭和43	1	25	製薬化学科棟鉄筋コンクリート6階建（1,100坪）が竣工した。旧事務室を卓球室に改修した。
		4	1	製薬化学科に生物薬品化学講座が設置された。

69	昭和44	11	1	荒田義雄教授が第6代学部長に就任した。
		3	31	大場義樹教授（生物薬品化学）が東京大学薬学部から赴任した。
		4	1	三浦孝次教授（薬物学）が停年退官した。 製薬化学科に放射薬品化学講座が設置された。 附属実習施設として薬草園が設置された。 カリキュラム改正、各学科課程表（毎週授業時数）の改訂が行われた。
70	昭和45	6	1	三浦孝次教授（薬物学）の後任に五味保男教授が東北大学医学部から赴任した。 堀川正克教授（放射薬品化学）が京都大学医学部から赴任した。
		28		学生との懇談会が定例的に開催されるようになった。
		9	1	黒野吾市教授が附属薬草園長に併任された。
		3	25	最初の製薬化学科学生が卒業した。
72	昭和47	4	1	大学院薬学研究科（修士課程）に製薬化学専攻が増設された。 木村久吉助教授が薬草園の専任助教授に配置換えされた。 カリキュラム改正、「薬学部授業科目・単位数ならびに開講学期表」が制定された。
		4	1	実習委員会を新設し、実習器具の集中管理を行うことになった。
		4	1	高橋幸太郎教授が第7代学部長に就任した。
73	昭和48	4	1	高橋幸太郎教授が附属薬草園長に併任された。
		10		平本実教授（衛生化学）が停年退官した。 「薬学部の菜」を「薬学部便覧」に改訂した。
		11	1	平本実教授（衛生化学）の後任に宮崎元一教授が千葉大学薬学部から赴任した。
75	昭和50	4	1	黒野吾市教授（生薬学）が停年退官した。 亀田幸雄教授が附属薬草園長に併任された。 カリキュラム改正、カリキュラムの全面見直しを行いバランスのとれた薬学教育を実施した。
		11	1	高橋学部長が病気のため学部長を辞任した。 山本譲教授が第8代学部長に就任した。
76	昭和51	3		辰口に薬草園敷地（13,000坪）を確保した。
		4	1	細谷東一郎教授（薬品物理化学）が千葉大学薬学部へ転任した。
		4	1	亀田幸雄教授（微生物薬品化学）が停年退官した。 友枝宗光教授（薬化学）が退官した。
				友枝宗光教授（薬化学）の後任に金子主税教授が東京医科歯科大学医用器材研究所から赴任した。 細谷東一郎教授（薬品物理化学）の後任に伊藤道也教授が東京大学薬学部から赴任した。 亀田幸雄教授（微生物薬品化学）の後任に正宗行人教授が東京大学応用微生物研究所から赴任した。 黒野吾市教授（生薬学）の後任に津田喜典教授が昭和薬科大学薬学部から赴任した。 津田喜典教授が附属薬草園長に併任された。 この頃、北陸大学創設のため多数の教官が異動した。

第9章 薬学部

77	昭和52	4	1	<p>荒田義雄教授（薬品製造化学）が停年退官した。</p> <p>荒田義雄教授（薬品製造化学）の後任に花岡美代次助教授が昇任した。</p> <p>薬草園を薬用植物園に名称変更した。</p>	
78	昭和53	5	24	<p>昭和53年度国立大学薬学部長（科長・学長）会議を当番校として石川厚生年金会館で開催した（会期：5月24～25日）。</p>	
79	昭和54	1	1	<p>山名月中教授（製剤学）が医学部附属病院教授に配置換えとなり、薬剤部長専任となった。</p>	
80	昭和55	4	11	1	<p>藤井澄三教授が第9代学部長に就任した。</p>
			7	1	<p>高橋幸太郎教授（薬品分析学）が停年退官した。</p>
			7	1	<p>山本讓教授が学生部長に併任された。</p>
			19	1	<p>堀川正克教授（放射薬品化学）が病気のため逝去した。</p>
			5	1	<p>山名月中教授（製剤学）の後任に辻彰助教授が昇任した。</p>
8	1	<p>高橋幸太郎教授（薬品分析学）の後任に山内脩教授が大阪大学教養部から赴任した。</p>			
81	昭和56	3	1	<p>堀川正克教授（放射薬品化学）の後任に二階堂修教授が京都大学放射線生物研究センターから赴任した。</p>	
			11	1	<p>大場義樹教授が第10代学部長に就任した。</p>
83	昭和58	11	1	<p>五味保男教授が第11代学部長に就任した。</p>	
84	昭和59	4	1	<p>金子主税教授（薬化学）が東北大学薬学部へ転任した。</p>	
			7	1	<p>山本讓教授の学生部長併任が解除された。</p>
			7	1	<p>金子主税教授（薬化学）の後任に染井正徳助教授が昇任した。</p>
85	昭和60	4	1	<p>大学院薬学研究科生命科学専攻（博士課程）が設置された。</p>	
			3	<p>日本薬学会第105年会（組織委員長：山本讓 会期：4月3～5日）が金沢で開催された（参加者8,500名）。</p>	
87	昭和62	4	1	<p>大学院自然科学研究科（博士課程）設置に伴い、大学院薬学研究科生命科学専攻（博士課程）が廃止された。</p> <p>山内脩教授（薬品分析学）が名古屋大学理学部へ転任した。</p> <p>カリキュラム改正、化学系、生物系、医療衛生系の3コース制が導入された。</p>	
			10	1	<p>山内脩教授（薬品分析学）の後任に島田和武教授が東北大学薬学部から赴任した。</p>
			11	1	<p>花岡美代次教授が第12代学部長に就任した。</p>
88	昭和63	3	31	<p>山本讓教授（生化学）、木村久吉助教授（薬用植物園）が停年退官した。</p>	
			7	1	<p>山本讓教授（生化学）の後任に大熊勝治教授が帝京大学薬学部から赴任した。</p>
90	平成 2	4	1	<p>カリキュラム改正、教育職員免許法の改正に伴い教職に関する専門科目を廃止した。</p>	
			16	<p>木村久吉助教授（薬用植物園）の後任に御影雅幸助教授が富山医科薬科大学和漢薬研究所から赴任した。</p>	
91	平成 3	11	1	<p>宮崎元一教授が第13代学部長に就任した。</p>	
92	平成 4	5	25	<p>金沢大学薬学部・大学院薬学研究科教育研究白書が刊行された。</p>	
93	平成 5	4	1	<p>カリキュラム改正：課程区分の廃止に伴い教養科目を変更した（1</p>	

				月21日施行)
94	平成 6	11	1	大場義樹教授が第14代学部長に就任した。
		4		カリキュラム改正：4年一貫教育を実施するための全面改正を行った。
95	平成 7	3	31	藤井澄三教授（薬品合成化学）が停年退官した。
		5	26	平成7年度国公立大学薬学部長（科長・学長）会議を当番校としてKKRホテル東京で開催した。
		10	1	藤井澄三教授（薬品合成化学）の後任に石橋弘行教授が京都薬科大学薬学部から赴任した。
96	平成 8	11	1	二階堂修教授が第15代学部長に就任した。
		3	27	日本薬学会第116年会（組織委員長：花岡美代次 会期：3月27～29日）が金沢で開催された（参加者9,000余名）。
			31	宮崎元一教授（衛生化学）が停年退官した。
		4	1	既設学科の整備により大講座制を実施した（2学科13講座 2学科6大講座=薬効動態学、衛生分析科学、分子細胞薬学、医薬品化学、創薬資源学、活性相関物理化学）。
				大学院薬学研究科（修士課程）に医療薬学専攻（独立専攻）が設置され、医療薬剤学講座（宮本謙一教授が北陸大学薬学部から赴任、鈴木永雄薬物学助教授が教授に昇任）が新設された。
				教養部が改組され関崎正夫教授ら教官3名が本学部に配置換えになった。
				大場義樹教授が学生部長に併任された。
				カリキュラム改正、3コース制を廃止し基礎薬学と応用薬学のバランスのとれた教育を行い、医療薬学の講義・演習・実習の充実を図った。
		8	1	宮崎元一教授（衛生化学）の後任に早川和一助教授が昇任した。
		10	23	金沢大学薬学部学協会が発足した。
		12		金沢大学50年史（部局史）の編纂を始めた。
97	平成 9	2		薬用植物園横の道路拡張工事に伴う作業が始まった。
		3	31	伊藤道也教授（活性相関物理化学）、津田喜典教授（創薬資源学）が停年退官した。
		4	1	大学院薬学研究科（修士課程）は、大学院自然科学研究科の改組に伴い、博士前期課程（生命薬学専攻・医療薬学専攻）に統合された。
		4	1	医薬品化学講座（薬物代謝化学）に横井毅教授が北海道大学薬学部から赴任した。
				二階堂修教授が附属薬用植物園長に併任された。
		5	1	伊藤道也教授（活性相関物理化学）の後任に中垣良一助教授が昇任し、津田喜典教授（創薬資源学）の後任に太田富久教授が東北大学薬学部から赴任した。
98	平成10	3	31	大場義樹教授（薬効動態学講座）が停年退官した。

第9章 薬学部

【参考文献】

- 『加賀藩の秘薬』（三浦孝次著、石川県薬剤師協会、1967）
- 『金沢大学薬学部百年史』（三浦孝次著、1967）
- 『金沢大学十年史』
- 『金沢薬学会誌』
- 『金薬同窓会報』
- 『薬友会誌』
- 『薬学部教授会記録』
- 『薬学部学生便覧』
- 『薬学教育・研究白書』
- 『どくにんじん』
- 『シラバス（薬学部編）』
- 『金沢大学医学部百年史』
- 『金沢大学医学部百年史以降三十年の歩み』
- 『日本薬史学雑誌』
- 『日本薬学会百年史年表』